

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 山梨県教育委員会
 所在地 山梨県甲府市丸の内一丁目6番1号
 代表者職氏名 教育長 阿部 邦彦

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	やまなしけんりつにらさきこうとうがっこう	ふりがな	あかおか まさき
学校名	山梨県立韮崎高等学校	校長名	赤岡 正毅
ふりがな	にらさきしりつにらさきにしちゅうがっこう	ふりがな	しのはら としあき
学校名	韮崎市立韮崎西中学校	校長名	篠原 俊明
ふりがな	にらさきしりつにらさきひがしちゅうがっこう	ふりがな	こうの りょういち
学校名	韮崎市立韮崎東中学校	校長名	河野 良一
ふりがな	にらさきしりつにらさきしょうがっこう	ふりがな	ほりかわ かおる
学校名	韮崎市立韮崎小学校	校長名	堀川 薫
ふりがな	にらさきしりつほさかしょうがっこう	ふりがな	さくち けいいち
学校名	韮崎市立穂坂小学校	校長名	作地 慶一
ふりがな	にらさきしりつにらさきほくとうしょうがっこう	ふりがな	ふじもり はるひこ
学校名	韮崎市立韮崎北東小学校	校長名	藤森 治彦
ふりがな	にらさきしりつにらさきほくせいしょうがっこう	ふりがな	ひらいで あきら
学校名	韮崎市立韮崎北西小学校	校長名	平出 章
ふりがな	にらさきしりつあまりしょうがっこう	ふりがな	しのはら すすむ
学校名	韮崎市立甘利小学校	校長名	篠原 進

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校において、英語教育が早期に実施された場合の教育課程の在り方、及び中学校・高等学校への円滑な移行と教育目標・内容の高度化、各学校段階を俯瞰した系統性のある教育課程を研究開発する。

(2) 研究の概要

蕪崎市では平成25年度から二か年にわたり蕪崎高校と蕪崎東中学校の間に、英語教員の人事交流を行った。中・高の英語教授法が共有でき、生徒にとっては中学英語・高校英語という枠を感じない英語に取り組めたなど、大きな成果を上げている。また、昭和63年より、蕪崎市と姉妹都市であるフェアフィールド市と中学・高校生がお互いにホームステイするなど、英語・国際理解教育には積極的に取り組んでいる。

その取り組みを活かして、小学校第3学年、第4学年では、外国語活動の在り方について、“Hi, Friends!”を活用し研究を行う。第5学年、第6学年では英語科として、文部科学省が作成した補助教材を活用し、県が作成した具体的な指標の形式(CANDO形式)を基に地域の実情に合わせた指導方法と評価方法を研究する。また、研修会には中学校、高等学校の教員も参加して理解を深めるとともに、小・中・高教員間で授業研究会等の交流を行い小学校の指導内容について充実を図る。また、小学校における研究内容を踏まえ、中学校・高等学校での教育内容の開発を行う。今後は市内5つの小学校・2つの中学校と高等学校の連携を行い、10年間の指導内容の系統性と目標の高度化を研究する。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

蕪崎市では小学校に非常勤講師として1名、請負契約で1名、計2名のALTを、中学校には請負契約で各校1名、計2名のALTを配置して、英語教育の充実を図っている。小学校教員は89名の内、45人が「英語能力に関する外部試験」を経験し英語に関する意識も高い。また全中学3年生327人の内121名が英語検定を受験した経験があり、受験者も年々増加している。

現在全小学校で第1学年から第4学年で月に1～3回程度、高学年の外国語活動につなげる英語活動(国際タイム)を実施している。第5学年、第6学年については、外国語に親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目標とし、Hi, friends!を活用しALTと連携して、担任による外国語活動を実施している。しかし、第1学年から第4学年では各担任やALTが考えた様々な英語活動を行っているが、学校により指導方法にばらつきがあることが課題である。

中学校では教科担任と各学校に配置されたALTにより、生徒、教師が日常的に英語に慣れる環境があり、学習への取り組み、英検の取得率の増加など英語学習への意欲は高い。しかし、小・中学校の教員の交流が行われておらず、小中学校の連携の面で課題がある。

以上のことから、研究校において以下の5点について研究開発を行う。

- 1 小学校第3学年、第4学年の、外国語活動に対するその指導法と評価方法

- 2 小学校第3、4学年の外国語活動から5、6学年の英語科への円滑な接続の在り方
- 3 小学校第5学年、第6学年の英語科の学習内容、指導方法と評価方法（3年次はモジュール学習を含めた3コマ実施）
- 4 小学校第3学年から中学校第3学年までの学習到達目標の設定とそれに基づく指導内容、指導方法と評価方法
- 5 小学校・中学校・高等学校の連携内容と方法

②研究仮説

- 1 小学校第1学年、第2学年で国際タイム（仮称）を必要時間取り入れれば、第3学年、第4学年の外国語活動へ円滑に移行できるであろう。
- 2 小学校第3学年、第4学年の外国語活動を週1時間確保し、児童の発達段階及び他教科の学習内容を考慮しながら、共通教材 **Hi, friends!** を活用することで、指導法や評価の一貫性が保たれコミュニケーション能力の素地が育成されるであろう。
- 3 第5学年、第6学年において、小学校3、4学年での外国語活動をもとに、中学校との円滑な接続を視野に入れ、文部科学省が作成した補助教材や県が考案した学習到達目標（CAN-DO リスト）
を使い、学習内容や指導方法、評価方法を検証することで、4領域（聞くこと及び話すこと、読むこと及び書くこと）における能力が高まるであろう。
- 4 中学校では、小学校での英語科の開始を受けて、小中高の系統性を図った学習到達目標を設定し、互いに連携し、能力の育成を重視した指導を行うことで、初歩的な英語運用能力の向上が図れるであろう。
- 5 高等学校では小・中との系統性が保たれることで、一層の英語活用能力が高まるであろう。

③研究成果の評価方法

- 1 課題認識の的確性
 - ・ 各学校の課題意識や解決手段等の共通認識がなされた上で、各学校での研究が行われているか。
- 2 計画や手順の妥当性（教員アンケートの実施）
 - ・ 研究課題にあった計画が全職員の共通理解のもとで作成されているか。
 - ・ 児童生徒の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ、無理のない計画となっているか。
 - ・ 当初のねらいどおりに研究が進行しているか。
 - ・ 全教職員の士気が高まっているか。
 - ・ 児童生徒の変容を的確に把握する評価方法が確立されているか。また確実に把握がされているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・ 小学校第3、4学年において、コミュニケーション能力の素地が養われているか。
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積）
 - ・ 小学校第5、6学年において、英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることに慣れ、コミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。
（授業中の見とりや成果物）
 - ・ 小学校5、6学年において、4つの領域についての評価法が確立されているか。
 - ・ 中学校において、小学校との継続性のある指導方法、指導内容、カリキュラムとなって

いるか。(カリキュラムの妥当性の検証)

- ・ 中学校において「表現の能力」、「理解の能力」が向上しているか。
(定期テスト、外部検定試験の結果分析)
- ・ 小中学校における児童生徒の意識調査
(アンケート調査実施)
- ・ 教師の課題に対する認識や態度の変化が現れているか。
(意識調査、聞き取り、児童生徒への理解、教科への理解)

4 研究の結果得られた結論の実証度

(児童生徒の実態把握→到達目標→手立て(実践)→評価のサイクルの確認)

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第3学年 1コマ	第3,4,5学年 1コマ	第3,4学年 1コマ	第3,4学年 1コマ
②小学校 教科型	第6学年 2コマ	第6学年 2コマ	第5,6学年 2コマ	第5,6学年 3コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

小学校

1 研究対象児童 第3学年、第4学年、第5学年、第6学年

2 (1) 外国語活動の研究

年次目標 外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながらコミュニケーション能力の素地を養う。

(2) 英語科の研究

年次目標 「聞くこと」及び「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の態度を育成することに加えて、初歩的な英語の運用能力を養う。

3 目標を達成するための指導法の研究

(1) 第3学年、第4学年の外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

①Hi, friends! 1の活用

②発達段階や他教科の学習内容を踏まえ、各学年の学習内容、指導法、評価方法の研究

(2) 第5学年 第6学年の英語科との接続に配慮した外国語活動の研究

①Hi, friends! 1の活用

②第6学年の英語科につながる指導法、評価方法の研究

(3) 第6学年 英語科としての外国語指導の在り方の研究

①文部科学省作成の補助教材及び自主教材の活用

②学習到達目標の作成と指導法、評価方法の研究（週2コマ）

中学校

- 1 小学校との円滑な接続と外国語活動の成果を活かす指導の在り方
 - ・年次目標 学習したことを活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする力の育成
- 2 目標を達成するための指導法の研究
 - (1) 小学校の指導内容、指導方法の確認
 - (2) 考えや気持ちを伝えあう言語活動の在り方
 - (3) 小〈4〉・中〈3〉の7年間を見越した学習到達目標の設定

高等学校

- 1 中学校との円滑な接続と効果的な連携の在り方
 - (1) 教員、生徒の効果的な交流の在り方
 - (2) 小〈4〉・中〈3〉・高〈3〉の10年間を見越した学習到達目標の設定

第二年次（28年度）

小学校

- 1 研究対象児童 第3学年、第4学年、第5学年、第6学年
- 2 (1) 外国語活動の研究
 - 年次目標 外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながらコミュニケーション能力の素地を養う。
 - (2) 英語科の研究
 - 年次目標 「聞くこと」及び「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の態度を育成することに加えて、初歩的な英語の運用能力を養う。
- 3 目標を達成するための指導法の研究
 - (1) 第3学年、第4学年の外国語活動の効果的な指導の在り方の研究
 - ①Hi, Friends! 1（3学年）、Hi, Friends! 2（4学年）の活用
 - ②発達段階や他教科の学習内容を踏まえ、各学年の学習内容、指導法、評価方法の研究
 - (2) 第5学年、第6学年の英語科としての外国語指導の在り方の研究
 - ①文部科学省作成の補助教材及び自主教材の活用
 - ②学習到達目標の作成と指導法、評価方法の研究（週2コマ）

中学校

- 1 研究対象生徒 第1学年
- 2 小学校との円滑な接続と外国語活動の成果を活かす指導の在り方
 - 年次目標 学習したことを活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする力の育成
- 3 目標を達成するための指導法の研究
 - (1) 小学校の指導内容、指導方法を受け、英語力を向上させるための指導法の研究
 - (2) 考えや気持ちを伝えあう言語活動の在り方

(3) 小〈4〉・中〈3〉の7年間を見越した学習到達目標の設定

(4) 英語で行う英語の授業（主に第1学年）の実施、検証

高等学校

1 中学校との円滑な接続と効果的な連携の在り方

(1) 教員、生徒の効果的な交流の在り方

(2) 小〈4〉・中〈3〉・高〈3〉の10年間を見越した学習到達目標の設定

第三年次（29年度）

小学校

1 研究対象児童 第3学年、第4学年、第5学年、第6学年

2 (1) 外国語活動の研究

年次目標 外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながらコミュニケーション能力の素地を養う。

(2) 英語科の研究

年次目標 「聞くこと」及び「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の態度を育成することに加えて、初歩的な英語の運用能力を養う。

3 目標を達成するための指導法の研究

(1) 第3学年、第4学年の外国語活動の効果的な指導の在り方の研究

①Hi, Friends! 1（3学年）、Hi, Friends! 2（4学年）の活用

②発達段階や他教科の学習内容を踏まえ、各学年にあった学習内容、指導法、評価の方法

(2) 第5学年、第6学年 英語科としての外国語指導の在り方の研究

①文部科学省作成の補助教材及び自主教材の活用

②学習到達目標の在り方と指導法、評価方法の研究

③モジュール学習を活用した週3コマの学習時間の確保

中学校

1 研究対象生徒 第1学年、第2学年

2 小学校との円滑な接続と外国語活動の成果を活かす指導の在り方

年次目標 学習したことを活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする力の育成

2 目標を達成するための指導法の研究

(1) 小学校の指導内容、指導方法を受け、英語力を向上させるための指導法の研究

(2) 考えや気持ちを伝えあう言語活動の在り方

(3) 小〈4〉・中〈3〉の7年間を見越した学習到達目標の設定

(4) 英語で行う英語の授業（主に第1学年、2学年）の実施、検証

高等学校

1 中学校との円滑な接続と効果的な連携の在り方

(1) 教員、生徒の効果的な交流の在り方

(2) 小〈4〉・中〈3〉・高〈3〉の10年間を見越した学習到達目標の設定

○平成27年度の進捗状況・課題

第3学年、第4学年、第5学年については、**Hi, friends! 1** を使用し、担任とALTで外国語活動に慣れ親しむことを中心に指導している。昨年度までも総合的な学習の時間を活用し国際タイムとして外国語（英語）に取り組んだが、ゲームやカードづくりが中心で、アルファベットにはあまりふれてこなかった。本年度はアルファベットさがしやチャンツを中心に、楽しみながら取り組んできた。担任が外国語活動を指導した経験が少ないことから、10月に研修会を行った。スモールステップで繰り返し話すこと、電子黒板を活用して音声教材を使用するなど、実践的な研修を行った。反面、週1時間の指導時間では、全ての課程を終えることが困難であることが予想され、高学年の教科化に向けて、どうつなげていくか課題が残る。

第6学年は英語科として週に2時間指導している。**Hi, friends! 2** では「聞く」「話す」を中心に、文部科学省が示した補助教材と「アルファベットでフォニックス」を使用して「読む」「書く」を学習している。昨年度までの課題として、担任が指導をALTに頼ってしまう傾向にあった。本事業によって加配された教諭の指導のもと、夏季休業中にフォニックスの活用を中心とした研修を行った結果、担任の意識も高まり、クラスルームイングリッシュを多用するようになった。9月に行った児童アンケートでは6学年児童が「書く」や「読む」ことを楽しいと感じる児童の割合が5学年よりも高かった。また、11月に行った研究授業では今まで学習したことをもとに、桃太郎のオリジナル話をつくる学習をしたが、児童は何回も聞いていたフレーズを思い出し、生き生きと活動していた。今後は山梨県が作成したCAN-DOリストを教育課程の中に位置づけ、系統的に指導すること、英語科と他教科との関連を進めていくことなどが課題である。

中学校では、英語教員が授業参観や情報交換を通して小学校の学習内容を理解し、来年度の1学年の内容を高度化することを進めている。また、授業は英語で行うことを基本としているが、まだ完全に実施されないことが課題である。

高等学校では、授業参観を通して、小中学校との連携を進め、地区全体として英語教育の高度化を図っている。今後、スピーチを中心とした中高の連携を予定している。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

第一年次（27年度）

小学校

- 1 課題認識の的確性（英語教育担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員、保護者へのアンケートの実施 6月、11月）
 - ・ 児童の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
 - ・ 児童の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・ 小学校第3、4、5学年において、コミュニケーション能力の素地が養われているか。
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積、児童アンケートの実施 7月、12月）
 - ・ 小学校第6学年において、英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることに慣れ、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。
（授業中の見とりや成果物、パフォーマンステスト、児童アンケートの実施 7月、12月）
 - ・ 教師の課題に対する認識や態度の変化（意識調査、聞き取り 11月）

中学校

- 1 課題認識の的確性（英語教育担当者会での聞き取り）
- 2 研究のねらいの達成度
 - ・ 主に第1学年において、小学校との継続性のある指導方法、指導内容、カリキュラムとなっているか。
 - ・ 教師の課題に対する認識や態度の変化
（意識調査、聞き取り）英語科職員 1月

高等学校

- 1 小中高一貫した学習到達目標の検証
- 2 学習到達目標を把握するために、評価方法の改善
（校内テストやパフォーマンステスト等）

第二年次（28年度）

小学校

- 1 課題認識の的確性（英語教育担当者会での聞き取り）
- 2 計画や手順の妥当性（教員、保護者へのアンケートの実施 6月、11月）
 - ・ 児童の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
 - ・ 児童の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・ 小学校第3、4学年において、コミュニケーション能力の素地が養われているか。
（授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積、児童アンケートの実施 7月、12月）
 - ・ 小学校第5、6学年において、英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることに慣れ、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が育成されているか。

(授業中の見とりや成果物、パフォーマンステスト、児童アンケートの実施 7月、12月)

- ・ 教師の課題に対する認識や態度の変化 (意識調査、聞き取り 11月)

中学校

- 1 課題認識の的確性 (英語教育担当者会での聞き取り)
- 2 計画や手順の妥当性 (教員への見とり・アンケート 11月)
 - ・ 生徒の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
 - ・ 生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・ 主に第1学年と第2学年において、小学校との継続性のある指導方法、指導内容、カリキュラムとなっているか。(カリキュラムの妥当性の検証、中学1年生へアンケートの実施)

高等学校

- 1 小中高一貫した学習到達目標の検証
- 2 学習到達目標を把握するために、評価方法の改善
(校内テストやパフォーマンステスト等)

第三年次 (29年度)

小学校

- 1 課題認識の的確性 (英語教育担当者会での聞き取り)
- 2 計画や手順の妥当性 (教員、保護者へのアンケートの実施 6月、11月)
 - ・ 児童の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
 - ・ 当初のねらいどおりに研究が進行しているかどうか。
 - ・ 教職員の士気が高まっているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・ 小学校第3、4学年において、コミュニケーション能力の素地が養われているか。
(授業中の見とりや成果物による児童の評価の蓄積、児童アンケートの実施 7月、12月)
 - ・ 小学校第5、6学年の授業時数増加にともない、英語を聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることに慣れ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されているか。
(授業中の見とりや成果物、パフォーマンステスト、児童アンケートの実施 7月、12月)
 - ・ 英語科の評価方法
(読むこと及び書くことのテスト等)
 - ・ 教師の課題に対する認識や態度の変化 (意識調査、聞き取り 11月)
 - ・ モジュール学習の効果的な活用法の検証
(教員アンケートの実施 11月)

中学校

- 1 課題認識の的確性 (英語教育担当者会での聞き取り)

- 2 計画や手順の妥当性（教員への聞きとり・アンケート 11月）
 - ・生徒の実態や学校、地域社会の現状を踏まえ無理のないものとなっているか。
 - ・生徒の変容や保護者等の反応などが的確に把握されているか。
- 3 研究のねらいの達成度
 - ・全学年において、小学校との継続性のある指導方法、指導内容、カリキュラムとなっているか。（カリキュラムの妥当性の検証、中学1、2年生へアンケートの実施 7月）
 - ・中学校において「表現の能力」、「理解の能力」が向上しているか。
（パフォーマンステスト、定期テスト）第1学年、第2学年 6月 11月
 - ・教師の課題に対する認識や態度の変化
（意識調査、聞き取り）英語科職員 1月
- 4 研究の結果得られた結論の実証度
（「児童生徒の実態把握→到達目標→手立て（実践）→評価」のサイクルに従い検証）
高等学校
 - 1 小中高一貫した学習到達目標の検証
 - 2 学習到達目標を把握するために、評価方法の改善
（校内テストやパフォーマンステスト等）

○平成27年度の進捗状況・課題

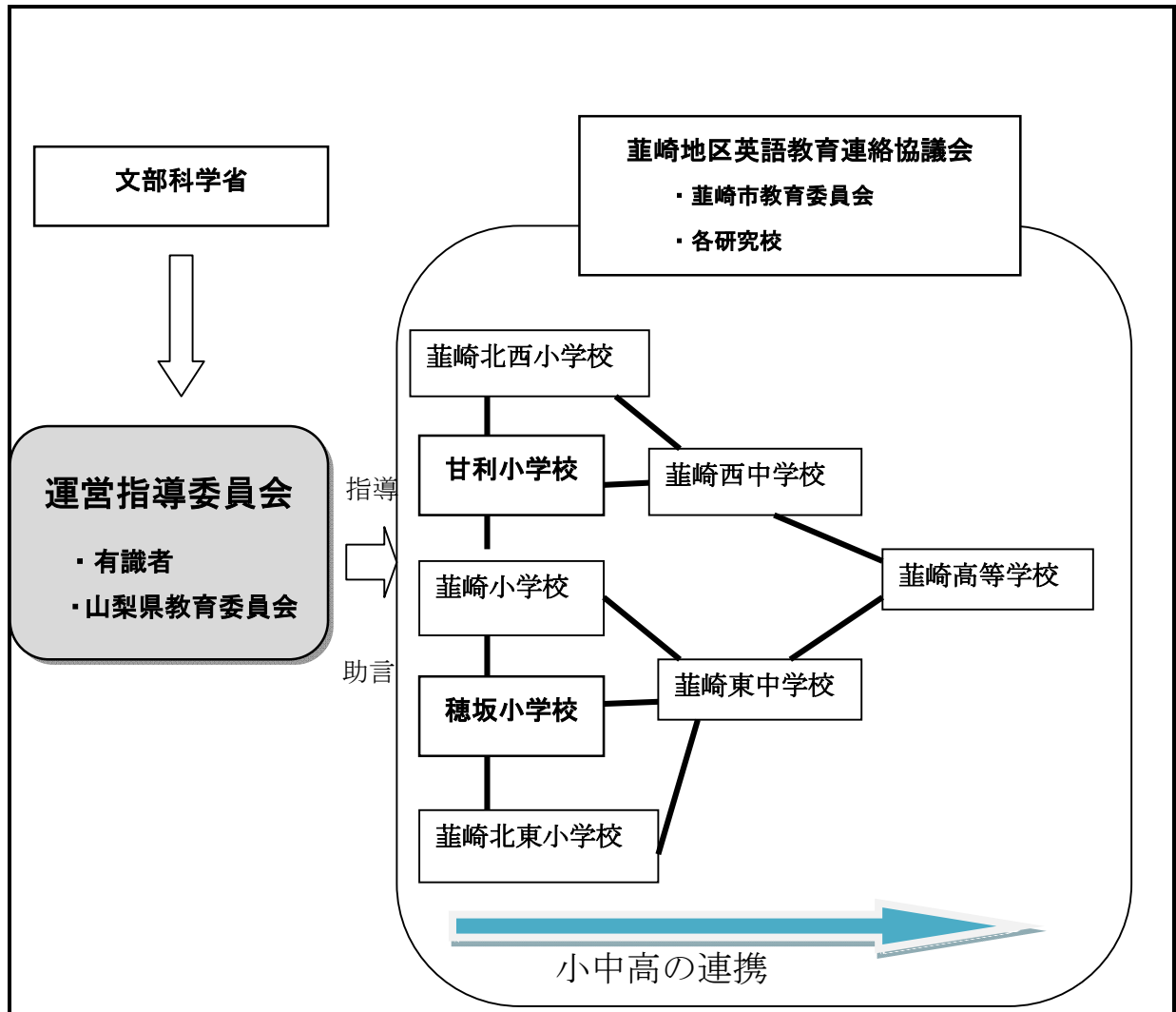
月に1回行う英語教育担当者会で各学校の取組について情報交換を行うことで、指導内容や課題を共有した。学校間で教師の取り組む意欲にやや開きがあることが課題である。

3～6学年の児童について英語に関するアンケート調査を行った。6学年は2時間英語科を学習しているので「とても楽しい」と答えた割合が一番高かった。また、6年生はHi, friends! Plusを学習しているので。「読んでみたい」「書いてみたい」意識が高かった。

5年生も6年生も「外国のことをもっと知りたい」意識が高い。この意識を学習内容と結びつけると学習意欲も高まると考えられる。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

○第1回運営指導委員会の開催

- ・各強化地域拠点が、平成27年度の取組内容、計画について説明。運営指導委員はその説明に対して指導・助言を行う。

○第2回運営指導委員会の開催

- ・各強化地域拠点が、取組の中間報告を行う。第1回運営指導委員会での指導・助言をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、報告する。運営指導委員はその報告に対して指導・助言を行う。

○「山梨県英語フォーラム」での指導・助言

・ポスターセッションの形式で研究校が取組を発表する。運営指導委員は研究校の発表内容について、指導・助言を行う。

○「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」での指導・助言

・強化地域拠点ごとを取組成果を発表する。運営指導委員は強化地域拠点の発表内容について、指導・助言を行う。

○第3回運営指導委員会の開催

・各強化地域拠点が、1年間の取組の成果と課題を報告する。運営指導委員会は、報告を踏まえ、次年度に向けてのアドバイスをを行う。

5. 年間事業計画

◎山梨県教育委員会関連事業

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	○小学校外国語、英語担当指導員研修会（中学校英語授業参観）	第1回山梨県英語教育強化推進委員会 ・各拠点地域より、取組の内容、計画について説明。 ・指導運営委員による、説明に対しての指導・助言。
5月	○小中高英語教育担当者会	
6月		
7月	○小中高英語教育担当者会	
8月	○小中高英語教育担当者会 ○小学校外国語、英語担当指導員研修会	
9月	○先進地視察研修（千葉県流山市）	
10月	○小中高英語教育担当者会（3.4学年外国語活動研修会） ◎「山梨県英語フォーラム」の開催	○第2回山梨県英語教育強化推進委員（山梨県英語フォーラム）

	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスターセッション形式で研究校が取組を発表。27年度は小学校研究校が発表する。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。 	<p>(15日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスターセッション形式で研究校が取組を発表。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。
11月	○小中高英語教育担当者会（授業研究会）	
12月		
1月	○小中高英語教育担当者会（教務主任含む）	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ○小中高英語教育担当者会（授業研究会） ◎「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」の開催 ・強化地域ごとに取組成果を発表。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。 	<ul style="list-style-type: none"> ○第3回山梨県英語教育強化推進委員会（英語教育強化地域拠点事業成果発表会）（9日） ・各拠点地域より1年間の取組の成果と課題の報告。 ・運営指導委員による次年度に向けてのアドバイス。
3月	○小中高英語教育担当者会	
【その他の取組】※あれば記入		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 山梨県教育委員会
 所在地 山梨県甲府市丸の内一丁目6番1号
 代表者職氏名 教育長 阿部 邦彦

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	やまなしけんりつこうふしょうわこうとうがっこう	ふりがな	ないとう たけし
学校名	山梨県立甲府昭和高等学校	校長名	内藤 剛
ふりがな	しょうわちょうりつおしはらちゅうがっこう	ふりがな	たかの ひろし
学校名	昭和町立押原中学校	校長名	鷹野 弘
ふりがな	しょうわちょうりつおしはらしょうがっこう	ふりがな	おおた みつる
学校名	昭和町立押原小学校	校長名	太田 充
ふりがな	しょうわちょうりつさいじょうしょうがっこう	ふりがな	たなか ともやす
学校名	昭和町立西条小学校	校長名	田中 伴泰
ふりがな	しょうわちょうりつじょうえいしょうがっこう	ふりがな	しむら たかし
学校名	昭和町立常永小学校	校長名	志村 隆

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校における一部教科化を含む英語教育の拡充、及び中学校、高等学校における英語科の高度化が実施された場合の、小中高を貫く系統性ある教育課程の編成実施に係る要件を明らかにする。

(2) 研究の概要

「昭和町教育方針」(平成26～30年度)では、「時代の要請に応える教育の推進」のひとつとして、英語教育の拡充をあげている。この具現化に向け、町内にある県立高等学校と連携し、中学校1校、小学校3校において、次回学習指導要領の改訂に資する実証的データを提出する。

研究の視点として、まず、小学校中学年における外国語活動の週時間割への位置づけや、小学校高学年における文字学習を含めた教科化等、小学校における改変を試みる。伴って小中高を貫くCAN-DOリストによる指導・評価体系の整備、ICT活用及び教材の工夫等による指導方法の研究を行う。さらに、中核的教員のリーダーシップによる小学校教員の研修の充実や、言語活動及び文化・伝統の理解等に係る他の教科等との横断的学習の推進、モジュールによる英語科の授業時数の運用等を図り、グローバル化に対応できる英語指導力の向上や、教育課程の効果的運用に関わる要件を追究していく。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

本町内の3小学校では、標準時数外で、第1・2学年では年間13時間、第3、4学年では年間15時間の「英語活動」を実施している。これまで、第5・6学年の「外国語活動」とともに、2名のALTが担任を補助しながら、活動的な内容で学習内容を編成実施している。

子どもたちは活動に親しみ、毎時間を楽しみにしている。ただしその中では、高学年になるに従い、活動主体の内容を越え、文字の学習をしたいという希望や意欲が増していく例や、語彙や語順などに係る明確な理解を求めようとする例も見られ、活動主体の内容について、全ての子どもたちが同様の満足度にあるとは言い切れない点がある。

また、それぞれの出身小学校における活動内容は同一のものではない実状もあり、中学入学後の一定時期においては、担当教師の配慮のもと、ゆったりとした指導過程が仕組まれている。やがて文字学習が始まると、学力差が現れ始め、いわゆる英語嫌いを生む可能性が高くなる傾向も少なからずある。子どもたちの発達特性もふまえて、小学校から中学校に至る学習履歴を総合的に見つめ直すことが必要な時期にきている。

平成26年度においては、本町教育委員会の主催により、小中合同の英語教育研修会を初めて開催し、小中間の情報交換や共通理解を図ったところであるが、今後もさらに、一貫した方針の確認と校種別・学年別の段階的な指導内容の明確化を進め、それぞれの学習履歴の円滑な接続を図ることが求められる。

そもそも、英語教育の強化が求められる背景には、グローバル化に対応できるよう、英語によるコミュニケーション能力を向上させていきたいという社会の要請課題がある。本町の教育方針にも「時代の要請に応える教育の推進」のひとつとして、英語教育の拡充を目指すことが明記されている。さらには、近年、本町においてはタブレット端末(iPad)の導入や、全学校のコミュニティ・スクール化(平成27年4月1日に完了)などの取組も進めており、人的・物的資源の活用に係る条件や仕組みが整備されてきている。

以上のことから、本研究においては、以下を視点として、今後求められる英語教育のあり方について、実証的に明らかにしていくことを目的として、実践を進める。

ア 小学校中学年における、外国語活動実施の早期化。

イ 小学校高学年における、文字指導を含めた英語の教科化。

ウ 小中高を貫くCAN-DOリストによる指導・評価体系の整備。

- エ ICT活用および教材の工夫による、音声と文字の関係等に係る効果的な指導方法の開発。
- オ 中核的な教員のリーダーシップに基づく、小学校職員の研修機会の充実と英語指導力の向上。
- カ 言語活動や文化・伝統等に係る他教科等との横断的単元の試みや、モジュールによる授業時数運用、ボランティア活用等も含めた教育課程の実施。

②研究仮説

- ア 小学校第3・4学年において、週1時間の外国語活動を確保し、Hi, friends! 1を共通教材として利用して、子どもたちの発達段階や実態に応じた指導を実施すれば、小学校第5・6学年以降の内容にも円滑に接続していき、コミュニケーション能力の素地が育成されるだろう。
- イ 第3・4学年の外国語活動の成果を活かすようにして、第5・6学年において、文字指導を含めた教科としての英語学習を実施すれば、4領域（聞く・話す・読む・書く）を貫く力を育成でき、中学校以降の英語学習にも円滑に接続できるだろう。
- ウ 小中高の教員による綿密な情報共有と連絡協議を通じて、児童生徒と共有できるCAN-DOリストを整備し、活用していけば、指導と評価の内容も体系的に扱われることとなり、小中高を貫く英語教育の内容の高度化が、円滑に進められるであろう。
- エ 動画コンテンツ、テレビ会話のアプリケーション等が利用できるICT機器の活用や、絵カード、具体物などの教材の工夫により、事物・事象と、音声・文字の関係に気付き、英語を活用していく力の素地を、効果的に育てることができるであろう。
- オ 専門家による研修を経た中核的な教員が、リーダーシップを発揮しながら、各小学校等での研修や授業研究などに出向いて、指導的立場となって活動すれば、小学校教員の研修が充実し、英語指導力の向上につながるであろう。
- カ 言語活動への意欲の涵養、自国文化や地域伝統の理解等について、他の教科等との横断的単元を通して仕組んだり、モジュールによる授業時数運用を通じて英語を学ぶ機会を継続的に設けたりしていけば、グローバル化に対応する力を効果的に育む教育課程としていくことができるであろう。

③研究成果の評価方法

- ア 有識者の指導助言を通じた、課題認識、課題解決方法、結果分析に係る妥当性などの評価。
- イ 小中高の関係職員で構成する連絡協議会や、英語教育担当者会での連絡協議等を通じた、課題認識、課題解決方法、結果分析に係る妥当性などの評価。
- ウ 児童生徒を対象として、複数回の意識調査を通じた、意識変容の経緯の把握と、その要因分析。
- エ 児童生徒を対象とした学力調査を実施することを通じた、学習内容の構成や、指導上の手だてに関する評価。
- オ ICT活用を伴った授業分析とふり返りを通じた、効果的な指導方法に関する評価。
- カ 研究によって導びかれた結論について、次回の実践場面で再現できるものかどうかという点（再現性）からの評価。

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 1コマ
②小学校 教科型	第 学年 コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 3コマ (モジュールを含む)

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

1年目 (平成27年度)

小学校

- 1 これまで、標準時間外に行っていた英語活動 (第1～4学年) における成果を活かし、研究第1年次の小学校英語科 (第5・6学年/週2コマ) に接続するための工夫に関する研究
 - ・英語活動の既習内容に関する児童の状況の把握 (4月)
 - ・意識調査 (4月・10月・2月) による児童の意識の把握
 - ・第5・6学年児童が以後の研究事業下でめざすべき達成目標の検討と、それを踏まえた Can-do リスト等の計画への反映
- 2 研究事業第2年次以降において実施する英語科 (第5・6学年/モジュールを含む週3コマ) の教育課程の検討と整備
 - ・当該学年児童が研究事業下でめざすべき達成目標の検討
 - ・学年間の円滑な接続を図るための Can-do リスト等、教育課程に関する諸計画の整備
 - ・学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
 - ・モジュール授業において効果的な内容設定の検討
- 3 第3, 4学年活動型 (週1コマ) の授業において、児童に実施する教育課程の検討と整備
 - ・当該学年児童がめざすべき達成目標の検討
 - ・小学校英語科との円滑な接続を図るための Can-do リスト等、教育課程に関する諸計画の整備
 - ・学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
- 4 ICTを活用した授業の工夫に関する検討
 - ・プロジェクターや電子黒板、タブレット端末等を利用した指導方法に関する情報収集と試行的実践、また、研究第2年次以降における活用計画の作成
(特に、視聴を通じて文字と音声の関係に自然に気付けるようにしたり、ネットワークを介して会話などを行ったりするための ICT 活用の調査研究)
- 5 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携

- ・町の連絡協議会を通じた、目標・指導・評価の共有化に向けた取組
- ・授業担当者会を通じた、独自開発の教材や指導方法の工夫に係る情報交換及び検討

中学校

- 1 外国語活動の成果を活かしながら、今後の内容の高度化に接続するための内容の整備や工夫に関する検討と実践
 - ・外国語活動の既習内容に関する生徒（第1学年）の状況の把握（4月）
 - ・意識調査（4月・10月・2月）による生徒の意識の把握
 - ・第1学年生徒が研究事業下でめざすべき達成目標の検討と、それを踏まえた Can-do リスト等諸計画への反映
- 2 研究第2年次以降において小学校教科型を経験した生徒に対して実施する教育課程の検討と整備
 - ・当該学年生徒が以後の研究事業下でめざすべき達成目標の検討
 - ・小学校英語科との円滑な接続を図るための Can-do リスト等、教育課程に関する諸計画の整備
 - ・学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
- 3 ICT を活用した授業の工夫に関する検討
 - ・プロジェクターや電子黒板、PC等を利用した指導方法に関する情報収集と研究第2年次以降における活用計画の作成
- 4 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携
 - ・町の連絡協議会を通じた、目標と指導及び評価の共有化に向けた取組
 - ・授業担当者会を通じた、独自開発の教材や指導方法の工夫に係る情報交換及び検討

高等学校（※研究対象 普通科全クラス）

- 1 Can-do リストに基づく目標と指導及び評価の一体化
 - ・前年 Can-do リストの目標の見直し及び修正、生徒の視点から活用しやすいレイアウトの工夫
 - ・Can-do リストと連動したシラバスの作成
- 2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
 - ・生徒が英語の使用に慣れ、自分の考えや意見を表現しやすい言語活動の開発
 - ・生徒が言語活動を通して身に付けたい力や目標が明確に提示された効果的なルーブリックの開発
- 3 ICT を活用した授業の工夫
 - ・プロジェクターを利用した効果的な指示や例示による授業展開
- 4 観点別による評価の工夫
 - ・成績評価（100点満点）の内訳が学習場面別と観点別の両面から示される成績個票の開発
- 5 職員の協働体制の確立
 - ・目標と指導及び評価の共有化、及び教科書以外の独自開発教材の共有化
 - ・定期的な教科会議の開催（前項2、3の内容を中心とした意見交換の場）

2年目（平成28年度）

小学校

- 1 時数が増加した中学年活動型の授業を経験した児童（第5学年）及び教科型の授業を第5学年で経験した児童（第6学年）に対して実施する英語科の教育課程の研究
 - ・小学校教科型の既習内容に関する児童の状況の把握（4月）
 - ・意識調査（4月・10月・2月）による児童の意識の把握
 - ・第5・6学年児童が第3年次でめざすべき達成目標の検討と、それを踏まえた Can-do リスト等諸計画への反映
 - ・一部モジュールによる時数運用を図る中での、効果的な学習の要件の明確化。
- 2 時数が増加した中学年活動型の授業の教育課程の実践
 - ・活動型（町独自で行っていたものを含む）の既習内容に関する児童の状況の把握（4月）
 - ・意識調査（4月・10月・2月）による児童の意識の把握
 - ・第3・4学年児童が第3年次でめざすべき達成目標の検討と、それを踏まえた Can-do リスト等諸計画への反映
- 3 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
 - ・自分が自分の思いや考えを表現しようとする力を育成する言語活動の開発
 - ・児童が身につけたい言語活動の目標が明確に提示された効果的なルーブリック等の開発
 - ・グローバル化やESDなど、他教科等の素材、要素と関連した学習内容の整備と実施
- 4 ICT を活用した授業の工夫に関する検討
 - ・プロジェクターや電子黒板、タブレット端末等を利用した指導方法に関する試行的実践及び研究第3年次以降における活用計画の作成
（特に、視聴を通じて文字と音声の関係を直感的にとらえられるようにしたり、ネットワークを介して会話などを行ったりするための ICT 活用の調査研究）
- 5 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携の強化
 - ・目標と指導及び評価の共有化に向けた取組
 - ・独自開発の教材や指導方法の工夫に係る情報交換及び検討
 - ・英語指導力を高めるための研修のあり方に関する検討

中学校

- 1 小学校教科型を経験した生徒に対して実施する教育課程の実践
 - ・小学校教科型の既習内容に関する生徒の状況の把握（4月）
 - ・意識調査（4月・10月・2月）による生徒の意識の把握
 - ・第1学年生徒が第3年次でめざすべき達成目標の検討と、それを踏まえた Can-do リスト等諸計画への反映
- 2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発
 - ・生徒が自分の思いや考えを表現する力を育成する言語活動の開発（国語科などとの関連もふまえて）
 - ・生徒が言語活動を通して身に付けたい力や、目標が明確に提示された効果的なルーブリック等の開発

3 ICT を活用した授業の工夫

- ・プロジェクターや電子黒板、P C 等を活用した授業実践

4 評価方法の検討と工夫

- ・パフォーマンス評価に係る方法、結果の表現形式等の検討と工夫

5 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携の強化

- ・目標と指導及び評価の共有化に向けた取組
- ・独自開発の教材や指導方法の工夫に係る情報交換及び検討
- ・小学校との合同の取組（キャリア教育一斉清掃活動、あいさつ運動など）に係る、英語による情報発信活動の推進

高等学校

1 Can-do リストを拠点とする目標と指導及び評価の一体化

- ・前年 Can-do リストのディスクリプターの見直し及び修正、生徒の視点から活用しやすいレイアウトの工夫
- ・Can-do リストと連動したシラバスの作成

2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発

- ・生徒が自分の考えや意見を即興的に表現する練習となる言語活動の開発
- ・生徒が言語活動を通して身に付けたい力や目標が明確に提示された効果的なルーブリックの開発

3 ICT を活用した授業の工夫

- ・タブレット端末を活用しての海外の学校とのオンライン交流

4 観点別による評価の工夫

- ・開発済み成績個票の改善及び改良

5 職員の協働体制の確立

- ・目標と指導及び評価の共有化、及び教科書以外の独自開発教材の共有化
- ・定期的な教科会議の開催（前項 2、3 の内容を中心とした意見交換の場）

3 年目（平成 29 年度）

小学校

1 Can-do リストに基づく目標と指導及び評価の一体化

- ・前年 Can-do リストの目標の見直し及び修正、児童と共有できるレイアウト等の工夫
- ・Can-do リストと連動した小学校 3～6 学年の各種教育計画（4 技能に関するマトリクス、使用教材、語彙やフレーズに係る一覧、グローバル化や ESD など、他教科等の素材・要素とのマトリクス整理など）の作成

2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発（前学年を対象とする実践研究。）

- ・自分が自分の思いや考えを表現しようとする力を育成する言語活動の開発（国語科などとの関連もふまえて）
- ・児童が身につけたい言語活動の目標が明確に提示された効果的なルーブリック等の開発

3 ICT を活用した授業の工夫

- ・プロジェクターや電子黒板、タブレット端末等を利用した指導方法に関する実践（特に、文字と音声の関係（フォニックス）などを直感的にとらえられるようにしたり、ネットワークを介した会話などを行ったりするための ICT 活用の調査研究）

4 評価方法の検討と工夫

- ・パフォーマンス評価に係る方法、表記形式等の検討と工夫

5 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携の強化

- ・Can-do リストを通じた目標と指導及び評価の共有化と集約
- ・独自開発の教材や指導方法の工夫に係る集約

中学校

1 Can-do リストに基づく目標と指導及び評価の一体化

- ・前年 Can-do リストの目標の見直し及び修正、生徒と共有できるレイアウト等の工夫
- ・Can-do リストと連動した中学校 1～3 学年の各種教育計画（4 技能に関するマトリクス、使用教材、語彙やフレーズに係る一覧等）の作成

2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発

- ・生徒が自分の思いや考えを表現する力を育成する言語活動の開発（国語科などとの関連もふまえて）
- ・生徒が言語活動を通して身に付けたい力や、目標が明確に提示された効果的なルーブリック等の開発

3 ICT を活用した授業の工夫

- ・プロジェクターや電子黒板、PC 等を活用した授業実践

4 評価方法の検討と工夫

- ・パフォーマンス評価に係る方法、表記形式等の検討と工夫

5 町内各校との連絡協議、授業交流等を通じた小中高の連携の強化

- ・Can-do リストを通じた目標と指導及び評価の共有化と集約
- ・独自開発の教材や指導方法の工夫に係る集約

高等学校

1 Can-do リストに基づく目標と指導及び評価の一体化

- ・前年 Can-do リストの目標の見直し及び修正、生徒の視点から活用しやすいレイアウトの工夫
- ・Can-do リストと連動したシラバスの作成

2 Can-do リストの学年目標に応じた効果的な言語活動及び教材全般の開発

- ・生徒が自分の考えや意見をディスカッションやディベート形式で発表する言語活動の開発
- ・生徒が言語活動を通して身に付けたい力や目標が明確に提示された効果的なルーブリックの開発

3 ICT を活用した授業の工夫

- ・発表形式による言語活動におけるパソコンやタブレット端末の活用
- 4 前項（２）（３）を効果的に行うための教科横断での協力体制の構築
 - 例１ パソコン及びタブレット端末の扱い方、及びパワーポイント等のソフトを利用
しての効果的な資料作成 → 情報科
 - 例２ 熟議やディベートの基本知識の確認、及び日本語による演習 → 国語科
 - 例３ ディベートやディスカッションで扱うトピックに関する予備知識の確認 → 公
民科
- 5 観点別による評価の工夫
 - ・開発済み成績個票の改善及び改良
- 6 職員の協働体制の確立
 - ・目標と指導及び評価の共有化、及び教科書以外の独自開発教材の共有化
 - ・定期的な教科会議の開催（前項２～４の内容を中心とした意見交換の場）

○平成２７年度の進捗状況・課題

- ・今年度、小学校６年では、週２コマの英語科の授業で **Hi, friends! 2** と **Hi, friends! plus** を使った授業の工夫と **CAN-DO** リストを評価に取り入れた指導の研究を行った。週２コマの中で、**Hi, friends! 2** と **Hi, friends! plus** を使った授業は、児童にとってはゆとりがあり、英語への興味関心が高まった。小学校５年生についても同様に **Hi, friends! 1** を使用した週２コマでの授業は、児童にとってわかりやすく、意欲的に取り組むことができた。
- ・これまでの実施計画では、平成２８年度の授業時数を週３コマにし、１時間をモジュールによる学習としていた。しかし、今年度、各小学校でモジュールを取り入れた教育課程を作成するための研究を行ってきた中で今後も継続して研究していくことが必要であると判断し、平成２８年度の週３コマの実施は時期尚早ではないかとの結論に至った。そこで、当初の計画を見直し、平成２８年度は授業時数を今年度と同様の２コマに変更、研究を続けていくこととしたい。
- ・外国語に慣れ親しむために小学校１年生と２年生で年間１０時間の外国語活動を行っている。
- ・小学校３年生と４年生の外国語活動を週１コマで実施している。教材は、**Hi, friends! 1** を使用し、内容を編成し、授業を行っている。また、平行して平成２８年度に向けての教育課程の編成作業も行っている。
- ・中学校の英語教員と小学校の教員合同による指導力向上のための研修会の開催は、小中の連携が深まり、実のある研修になった。
- ・学級担任は、クラスルームイングリッシュをはじめ、できるだけ英語での指示や説明を行ない児童に英語に慣れ親しむ指導を行っている。
- ・今後の課題は、小学校から中学校への円滑な接続を行うために、系統的な教育課程を考えていく必要がある。より一層、小・中の連携を密にし、小学校で学習した内容や到達度を確実に中学校へ引き継ぐとともに、また、教育課程の中に **CAN-DO** リスト を評価に取り入れるように整備していく。
- ・先進校視察を通して、英語教育の指導法や取り組み状況を学ぶことができた。
- ・次年度は、児童生徒による小中高連携の連携を計画し、英語教育の円滑な移行につなげたい。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

○第一年次～第四年次、校種別

1年目

小学校

- 1 行動観察記録（活動型、教科型の授業において）
- 2 パフォーマンス課題（教科型の授業において）
- 3 文字の聞き取り、読み書きのテスト

中学校

- 1 定期考査（年5回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時等に実施）
- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（長期休業明けに実施）

高等学校

成績評価にあたっては100点満点で評価する。この100点満点のうち、定期考査（筆記試験）が占める割合を60%とし、残る40%を平素の学習活動による評価とする。平素の学習活動には、パフォーマンス課題を中心に、単元テスト、学力テスト、レポート、小テスト等が含まれる。

パフォーマンス課題とは、本校の Can-do リスト（3年間を見通した学習到達目標）に4技能及びグレード別に記載されている目標を達成できたかどうかを判断するために行われる様々な英語による言語活動のことである。

パフォーマンス課題の実施にあたっては、具体的なルーブリック（評価規準及び基準）を生徒に提示した上で取り組ませる。このパフォーマンス課題は基本的に教科書の各単元終了時に行う。

定期考査の各設問及び平素の学習活動については、内容に応じて4観点に落とし込み、必ずどの観点に関わっているのかを予め明確にし、観点別での成績評価へとつなげる。具体的には、100点満点の内訳が学習場面別と観点別の両面からわかる個票での成績返却を個人に対して行い、単なる成績通知にとどまらず、次の学習への具体的な手立てや目標を各自に立てさせるよう指導に役立てる。

以上のように、Can-do リストを出発点に、目標と指導及び評価の一体化を図った学習活動及び評価について3年間を通して行う。なお、直接評価には含まないが、Can-do リストには外部検定試験（英検）の目標取得級も示してあり、積極的な受験を促していく。

- 1 定期考査（年4回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時実施）
 - 例・自分の趣味や学校生活などの簡単な話題について話したり、その場で互いに質疑応答たりできる。
 - ・物事についての自分の考えや、「好き」「嫌い」などの理由を5～6文程度で書くことができる。
- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（週1回）

5 英検受験奨励

目標取得級：3級～準2級

2年目

小学校

- 1 行動観察記録（活動型、教科型の授業において）
- 2 パフォーマンス課題（教科型の授業において）
- 3 文字の聞き取り、読み書きのテスト

中学校

- 1 定期考査（年5回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時等に実施）
- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（長期休業明けに実施）

高等学校

- 1 定期考査（年4回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時実施）
例・身近な話題について、自分の考えや意見を理由や具体例を添えて8～10文程度で書くことができる。また、原稿に頼らずにそれを相手に伝えることができたり、その場で互いに質疑応答ができたりする。
・自分が紹介したい日本の文化などをプレゼンテーション形式で紹介することができる。
また、その場で質疑応答ができる。
- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（週1回）
- 5 英検受験奨励
目標取得級：準2級～2級

3年目

小学校

- 1 行動観察記録（活動型、教科型の授業において）
- 2 パフォーマンス課題（教科型の授業において）
- 3 文字の聞き取り、読み書きのテスト

中学校

- 1 定期考査（年5回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時等に実施）
- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（長期休業明けに実施）

高等学校

- 1 定期考査（年3回実施）
- 2 パフォーマンス課題（各単元終了時実施）
例・身近で馴染みがある話題について、グループでディスカッション形式で討論すること

ができる。

- ・賛否が論じやすい話題について、グループでディベート形式で討論することができる。

- 3 単元テスト・学力テスト（各単元終了時・長期休業明け実施）
- 4 英単語小テスト（週1回）
- 5 英検受験奨励

目標取得級：準2級～準1級

研究状況の評価（3カ年を通じて／小中高を通じて）

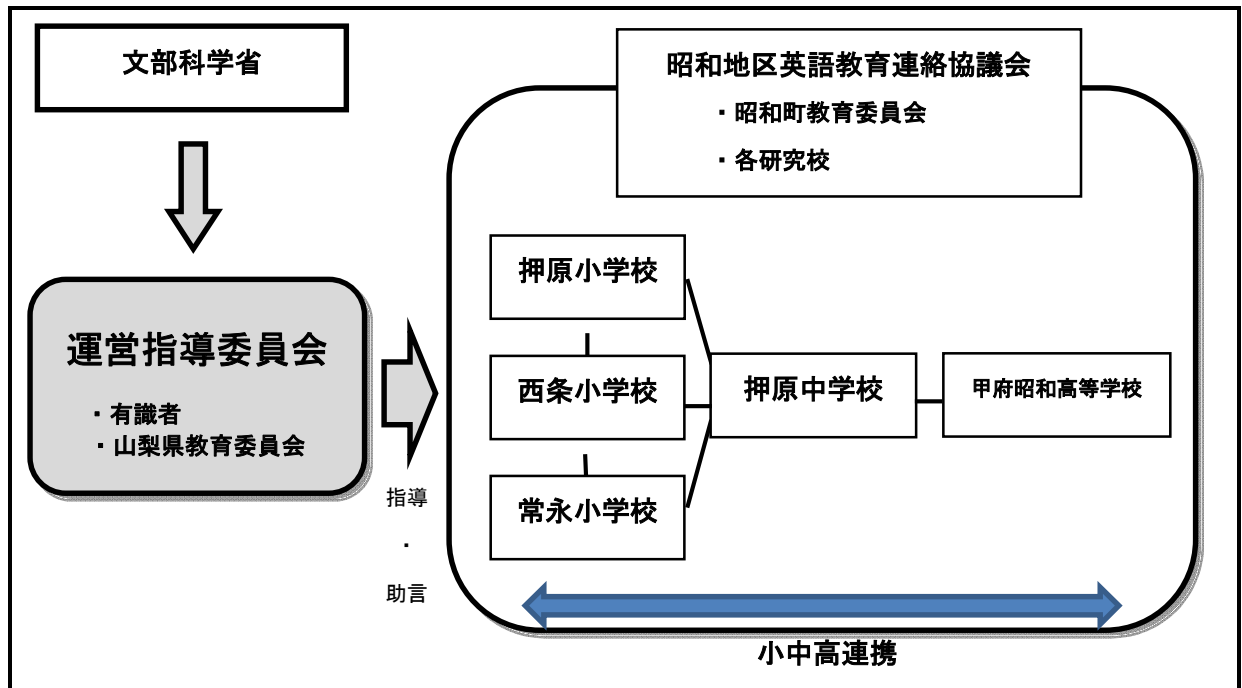
- 1 研究開発の課題に即した実施内容となっているかに係る評価
 - ・運営指導委員会での指導助言、昭和町英語教育強化連絡協議会での検討を通じて
- 2 第3年次における実践研究の実施効果に係る評価
 - ・学習状況の評価結果をふまえて
 - ・生徒の意識調査（4，10，2月）を踏まえて
 - ・授業研究を通じた参観者のコメント、地域・保護者の感想等を踏まえて

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・小学校1年～6年、中学校1年生を対象にアンケートを4月と10月実施し、児童生徒の英語に対する意識の変化を調査した。小学校における英語への興味関心が高まっている。
- ・パフォーマンス評価を授業の中で実施しながらその方法等の研究を行った。
- ・各小学校で外国語活動、英語科の授業研究を1回以上行い、全体での授業研究も1回行った。今後は、授業研究会において課題についての研究を一層深め、より実践力を高めていきたい。
- ・平成28年度に向けて、中学校1年の英語科の高度化に向けて指導法等を研究していきたい。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(4月30日木曜日)

- ・平成27年度の取組内容、計画についての説明会開催。

○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(10月15日木曜日 「山梨県英語フォーラム」)

- ・第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、ポスターセッション形式で研究校が研究計画を発表する。運営指導委員会が研究校の発表内容について指導・助言。

○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」)

- ・各強化地域拠点が、1年間の取組の成果と課題を報告する。運営指導委員会は、報告を踏まえ、次年度に向けて指導・助言。

○平成27年度の進捗状況・課題

- ・小・中・高の管理職と英語担当教員、教育委員会で組織した「昭和町英語教育連絡協議会」を3回実施し、事業の進捗状況や課題解決に向けた検討を行った。また、英語教育に関する情報を全体で共有することで、本町の小中高それぞれ研究をより深めることができた。

・小中高の英語担当者と教育委員会(担当者)による「英語教育推進研究会(担当者会議)」を行い、各学校の成果と課題を共有しながら、より実践的な研究会を実施した。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回昭和町英語教育連絡協議会 <ul style="list-style-type: none"> ・事業概要（目標，内容，方法，年間計画他）に関する連絡協議 ・第1回児童生徒意識調査(4月)に関する連絡協議 ○第1回小中高英語教育担当者会 <ul style="list-style-type: none"> ・研究第1年次における具体的な授業内容，作業課題等に関する意見交換 ○第1回児童生徒意識調査 <ul style="list-style-type: none"> ・町内小学校3年生～中学校3年生対象に外国語活動，英語科の学習に関する意識を調査 	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催 (4月30日木曜日) ・平成27年度の取組内容，事業計画について，運営指導委員会からの説明を受けて，研究計画の充実を図る。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回小中高授業参観交流 <ul style="list-style-type: none"> ・中学校授業の参観及び意見交換 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回小中高授業参観交流 <ul style="list-style-type: none"> ・小学校（A）授業の参観及び意見交換 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回小中高英語教育担当者会 <ul style="list-style-type: none"> ・1学期の各校取組に関する情報交換 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ○小中合同英語教育研修会 <ul style="list-style-type: none"> ・講師招請による研修会（英語教育の動向，指導方法等について） ○第2回昭和町英語教育連絡協議会 <ul style="list-style-type: none"> ・第2回運営指導委員会に向けての情報交換及び集約 ・山梨県英語フォーラムにむけての連絡協議 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○第3回小中高授業参観交流 <ul style="list-style-type: none"> ・高等学校授業の参観および意見交換 	

10月	<p>○第3回昭和町英語教育連絡協議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2回運営指導委員会を受けての、以後の取組に関する連絡協議 ・山梨県英語フォーラムに関する連絡協議 <p>○「山梨県英語フォーラム」の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスターセッション形式で研究校が取組を発表。27年度は小学校研究校が発表する。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。 	<p>○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催</p> <p>(10月15日木曜日「山梨県英語フォーラム」)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、ポスターセッション形式で研究校が研究計画等を発表する。 ・研究校は、運営指導委員会から指導・助言を受ける。
11月	<p>○第3回小中高英語教育担当者会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究第2年次における各学年の教育課程、研究内容に関する協議 	
12月	<p>○小中高授業参観交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校(B)授業の参観及び意見交換 	
1月	<p>○第3回昭和町英語教育連絡協議会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3回運営指導委員会に向けての情報交換及び集約 ・研究第2年次の計画内容に関する連絡協議 ・英語教育強化地域拠点事業成果発表会に向けての連絡協議 <p>○小中高授業参観交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校(C)授業の参観及び意見交換 	
2月	<p>○「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強化地域ごとに取組成果を発表。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。 <p>○第2回児童生徒意識調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町内小学校2年生～中学校3年生対象に外国語活動、英語科の学習に関する意識を調査(4月の調査結果と比較) 	<p>○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催</p> <p>(2月9日火曜日「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究校は、1年間の取組の成果と課題を報

	<p>○第4回小中高英語教育担当者会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3回運営指導委員会，児童意識調査を受けての，次年度研究開発計画及び各学年教育課程に関する検討 	<p>告する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究校は，運営指導委員会から次年度に向けての指導・助言を受ける。
3月		
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「英語情報発信活動」：キャリア教育の小中高合同町内清掃（7月），あいさつ運動（9月）等について，中学生が中心となり，学校ホームページを通じ，英語による情報を発信。小学生も絵や写真などの協力を通じて参加。 ・年間を通じ，各校の「学校支援地域会議」の下部組織が英語学習を支援。コミュニティ・スクール（※）としての取組の中で，児童生徒が，学校外部の方に学んだり，英語学習に関する刺激を受けたりする機会を設定。（※平成27年4月までに4校全部をコミュニティ・スクールとして指定した。） 		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 山梨県教育委員会
 所在地 山梨県甲府市丸の内一丁目6番1号
 代表者職氏名 教育長 阿部 邦彦

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	やまなしけんりつしらねこうとうがっこう	ふりがな	たけい たかし
学校名	山梨県立白根高等学校	校長名	武井 多加志
ふりがな	みなみあるぶすしりつしらねこまちゅうがっこう	ふりがな	しむら いさむ
学校名	南アルプス市立白根巨摩中学校	校長名	志村 勇
ふりがな	みなみあるぶすしりつしらねいいのしょうがっこう	ふりがな	ふじまき たかや
学校名	南アルプス市立白根飯野小学校	校長名	藤巻 孝也
ふりがな	みなみあるぶすしりつしらねひがししょうがっこう	ふりがな	とざわ さとし
学校名	南アルプス市立白根東小学校	校長名	戸澤 聡

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

自分の思いや考え、自国・地域の特色を伝えるために、英語によるコミュニケーション能力の育成を目指す。指導と評価の一体化、地域人材等を活用した授業形態を検証し、異校種間連携と職員研修を計画的に行い、系統的な英語教育の改善を図る。

(2) 研究の概要

研究校を中心に、①英語教育開始学年の早期化、②小学校高学年における英語教育の教科化、③小・中・高連携の中での到達度目標の高度化、④上記①～③を実践する上での指導と評価の系統的な一体化、⑤教職員研修の充実、を柱に研究開発を行う。ICTの活用で広く普及させることにも取り組む。具体的に、「①早期化」では、小学校3・4年で活動型授業を行い、他教科への影響や関連項目・時期等を検証する。「②教科化」では、「聞く・話す」を基本に言語活動を十分に行い、派生した「読む・書く」への意欲を大切に、4技能のバランスを顧慮した実践を目指す。「③目標の高度化」では、中学校3年間で「授業は英語で行うこと」を具現化し、卒業時の「英検3級取得」を計画し高校につなげていく。「④指導と評価の系統化」では、Can-doリストを活用し、指導と評価の一体化を系統的に行う。「⑤職員研修の充実」では、研修成果を電子媒体で共有し、ICTを活用した還流報告につなげ、普及率の向上を目指す。

(3) 現状の分析と仮説等

1 現状の分析と研究の目的

(ア) 「学校・地域の現状と課題」等

南アルプスの山々を中心とした本市の自然環境が、ユネスコエコパークに認定されたことを踏まえ、市全体としてもグローバル化への対応が急務となり、これまで以上に、外国語によるコミュニケーション能力の育成に注目が集まるようになった。今までは、グローバル化への関心が薄かった地域・子供達だったが、これからは子供達自身が自分の思いや考え、あるいは自国や地域の特色を相手に伝えるために、英語によるコミュニケーション能力の伸長が余儀なく求められる。また山梨県の教育振興プラン（未来を拓く「やまなし」人づくり）や南アルプス市憲章（未来にひらく豊かなまちづくり）等の具現化に向けて、研究校（小学校2校、中学校1校、高等学校1校）を中心として行う研究（①外国語教育開始学年の早期化、②小学校高学年における外国語教育の教科化、③小中高連携の中での到達度目標の高度化、④①～③を実践する上での指導と評価の系統化、⑤職員研修の充実）を研究開発の柱とし、数年後の学習指導要領の改訂を見据え、その成果を的確に普及させることを課題とし、研究実践に取り組んでいきたい。

(イ) 「研究の目的」等

①外国語教育開始学年の早期化について

現行の学習指導要領で行われている小学校第5学年、第6学年での「外国語活動」の成果を土台とし、内容・目的等を踏襲しながら、“Hi, friends!”等の教材を活用し、小学校第3学年、第4学年で授業研究を行う。更に、開始学年が早期化されたことによって、相当学年の他教科への影響や関連できる内容項目・時期等を検証し、担任が行う授業の利点を活かし、多方面から外国語活動の時間をサポートできる術を探っていく。

また、ALTや日本人の外国語教育に堪能な地域人材を活用し、いくつかの授業スタイルのパターンを試行し、発達段階や各学校の実情にあった授業形態の検証を行っていく。

②小学校高学年における外国語教育の教科化

小学校5学年までに外国語活動を経験した小学校6学年を対象に、“Hi, friends!”や文部科学省からの配付資料等の教材を活用しながら、活動型から教科型への発展を目指した授業研究を行っていく。具体的には「聞くこと・話すこと」を基本に言語活動を十分に行い、それらの活動から派生してくる「読むこと・書くこと」への意欲を大切に、発達段階や各校の実情を踏まえて、その導入を行っていく。急な「読み・書き」の活動は返って戸惑いを与えてしまうので、なるべく活動型と教科型にギャップが生じないように、授業内では意識的に4技能を統合的に取り組むことを試行し、4技能の総合的なバランスを顧慮した実践を目指す。例えば「書くこと」に関しては、「英語の単語を、ビジュアルとして捉える時期」が活動型から教科型への橋渡しとして必要な経験と認識することや、英語の文章を目にすることにより「英単語は1つの塊なんだ」、「英語には語順があるんだ」等の感覚的な「気付き」を促すことが、教科型へのスムーズな実践例として挙げられる。そのために工夫として、児童一人ひとりのホワイトボード活用を試行していく。また、「読むこと」に関しては、「絵本」を教材として、読むことへの興味・関心を大切に、必然性を伴った場面等を設定することを意識しながら実践していく。

また、ALTや日本人の外国語教育に堪能な地域人材を活用し、いくつかの授業スタイルのパターンを試行し、発達段階や各学校の実情にあった授業形態の検証を行っていく。

③小・中・高連携の中での到達度目標の高度化

中学校では、各小学校で外国語活動や教科型の英語科の授業を経験し、今まで以上に英語に興味を抱き、コミュニケーション能力の素地を培ってきた生徒に対し（1年目は想定）、授業内容や目標の高度化を目指し、3年間の系統的な教育課程を計画する。教師側の意図としては、中学校3年生には「授業は基本的に英語で行うこと」が具現化できるよう、生徒がそれに順応できる環境作りを3年間かけて行う。また、生徒側へ提示する目標としては、卒業時まで「実用英語技能検定3級の取得を目指すこと」を提示する。それらを現実にするために、小・小連携、小・中連携、中・高連携を組織的に推進する。具体的には、同校種や異校種間のカリキュラム調整はもちろんのこと、教材教具の共有化（小学校で教材と使用した絵やフレーズ、文部科学省が配付した資料等を中学校の初期段階の導入で使用する。高校についても同じ。）、交流授業や参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の連携、さらには授業公開や研究会による教員間の接続を計画的に行っていく。小学校での学習の早期化を活かしきれよう、小・中・高連携の中で教育課程の見直しを行う。

④上記①～③を実践する上での指導と評価の系統化

小学校から中学校、高等学校までを通して発達段階に沿った到達目標を、Can-do リストの形式で作成し、活用することによって指導と評価の工夫と一体化を組織的に行う。Can-do リストの工夫例としては、教師側だけが把握し評価に用いる形態ではなく、児童・生徒用にも発達段階に合わせた表現を用い提示し、「目標の見える化・共有化」を推進していく。それにより主体的な学びが児童・生徒側から行われるような環境作りを目指す。また評価については、特に中学校・高等学校にて「パフォーマンス評価」を積極的に取り入れることを試行し、今後の評価観点の作成や年間計画作成に系統的に役立てたい。これらの形成的な日常の評価活動をデータとしても蓄積し、学習指導要領の記述式評価への反映の仕方も研究の対象としていく。

⑤職員研修の充実

研究校で行っている取組状況を、研究会を開催して最小でも市内の全小中学校で情報共有し、実践できる部分を見つけ、まずは各校で試行していく。その実践を持ち寄り、次の研究会で情報提供を行い、より現実的で有用性に高い取組になるよう、外部からの指導・助言を求める、というスパイラルを組織し、教職員の研修を充実させていく。その研修の成果を電子データとして、教職員が共有できるようにし、構成員が各校に持ち帰り還流報告する際に活用し、実践をより広く普及させるために、ICTの活用も視野に入れて、研修を企画していく。

2 研究仮説

(ウ) 「手段」等

「①早期化」について

- ・ 現行の「外国語活動」の成果を土台とした指導法の工夫と、相当学年の他教科との関連
- ・ ALT や外部人材の活用による多様な授業スタイルの検証

「②教科化」について

- ・ 活動型から教科型への移行に伴う、4技能のバランスを顧慮した指導の工夫
- ・ 文部科学省の配付資料の活用
- ・ ALT や外部人材の活用による多様な授業スタイルの検証

「③目標の高度化」について

- ・ 「授業は基本的に英語で行う」「実用英語技能検定3級取得」に向けた3年間の系統的な

環境整備

- ・イベントや異校種間交流による，カリキュラム，児童生徒・教職員間の連携
- 「④指導と評価の系統性」について
- ・Can-do リストの活用による指導と評価の一体化の工夫（含：学習指導要領の記述評価）
 - ・パフォーマンス評価の積極的導入と評価観点の系統化
 - ・教材の共有化（含：文部科学省の配付資料の活用）
- 「⑤職員研修の充実」について
- ・参加型の研究会（情報共有－実践－助言）システムの構築
 - ・データを活用した還流報告の ICT 化による普及の工夫

(エ) 「具体的成果」等

「①早期化」について

- ・活動型の授業の中で，他教科との関連が題材にできる。
- ・ALT や外部人材の活用による多様な授業スタイルにより関心・意欲の高まりが見られる。

「②教科化」について

- ・4 技能のバランスを顧慮した指導法の工夫を蓄積できる。
- ・ALT や外部人材の活用による多様な授業スタイルにより関心・意欲の高まりが見られる。

「③目標の高度化」について

- ・「授業は基本的に英語で行う」ことに，教師も生徒も慣れようとする高まりが見られる。
- ・「実用英語技能検定 3 級取得」に向けた生徒の情意面の高まりが見られる。
- ・イベントや異校種間交流によるカリキュラム，児童生徒・教職員間の連携強化が見られる。

「④指導と評価の系統性」について

- ・Can-do リストの系統的な見直しができ，次年度へ向けて活用工夫例が蓄積できる。
- ・パフォーマンス評価の評価観点の系統的な蓄積ができ，次年度への活用が見込める。

「⑤職員研修の充実」について

- ・研究校の取組が，他校でも実践され早期化や教科化の利点が共有される。
- ・データの蓄積により，研究校以外でも目標の高度化や指導と評価の工夫が実践されている。

3 研究成果の評価方法

○①，②，③，④，⑤について

- ・実態調査（児童・生徒・教職員・保護者）の結果分析と経年比較を行う。

○①，②，③について

- ・外部試験（児童英検・英検）による英語運用能力や受験者数の分析や経年比較を行う。

○④について

- ・小学校 3 年生から高校までの Can-do リストに，評価との一体性や学年の系統性が反映されているものになっているかどうかを検証する。
- ・Can-do リストが教師版と児童・生徒版で整合性が計られているかどうかを検証する。

○⑤について

- ・研究校のデータを用いた，他校の実践内容と実践数の経年比較を行う。

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
① 学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3, 4, 5 学年 1 コマ	第3, 4 学年 1 コマ	第3, 4 学年 1 コマ
② 小学校 教科型	第 学年 コマ	第 6 学年 1 コマ	第5, 6 学年 1 コマ	第5, 6 学年 2.3 コマ (内0.3は、モジュールとする)

(5) 研究計画

平成27年度

- ・年度当初に、本事業に係る「南アルプス地区英語教育連絡協議会」を設置・開催し、研究校(小学校2校, 中学・高校各1校)と関係機関の連携を進め、年間の研究開発の具体策について確認する。
- ・市内22校外国語指導者研修会を開催し、事業への協力要請と情報共有を進め、広く普及を目指す。

小学校

- ・第3年生：“Hi, friends! 1”を中心教材として、活動型の授業を実施
- ・第4年生：“Hi, friends! 1”を中心教材として、活動型の授業を実施
- ・第5年生：“Hi, friends! 1・2”を中心教材として、外国語活動の授業を実施
- ・第6年生：“Hi, friends! 1・2”・文部科学省配付資料を中心教材として、教科型の授業を実施

○小学校英語の全体計画・教育課程の編成(含：他教科との関連)

※年間指導計画等については、市内にある英語特例校(H.24～芦安小)のデータを参考に作成

○ALTや地域人材を活用した多様な授業スタイルの検証

○教科型授業についての「読むこと・書くこと」に関する指導・教材の開発

(含：文部科学省の配付資料の活用, 6学年全児童への個人ホワイトボードの試行)

(含：英語版の絵本の読み聞かせ教材の開発と指導)

○Can-doリストの活用による指導と評価の一体化, 更には学年間の系統化についての情報収集

(含：学習指導要領への記述式評価との関連)

○校内研究と研究開発との関連付け

○拡大校内研究会の開催(含：小・小連携, 小・中連携, 小・中・高連携, ICT活用)

○参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会参加(含：イングリッシュキャンプ)

○外部試験(英検等)の啓発を兼ねた学習会の開催, 英語運用能力や参加状況の分析

○アンケート調査項目の内容検討と実施

中学校

○教材教具の活用(含：絵や文部科学省の小学校配付資料の中学校初期段階での活用)

(含：英語版の絵本の読み聞かせ教材の開発と指導)

○小学校英語(教科型)の既習者に対する全体計画・教育課程の再編成

○Can-doリストの活用による指導と評価の一体化, 更には学年間の系統化についての情報収集

- 校内研究と研究開発との関連付け
- 拡大校内研究会の開催（含：小・中連携，小・中・高連携，ICT 活用）
- 参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会参加（含：イングリッシュキャンプ）
- 外部試験（英検等）の啓発を兼ねた学習会の開催，英語運用能力や参加状況の分析
- パフォーマンス評価の実施と評価観点の系統性の検証
- アンケート調査項目の内容検討と実施

高等学校

- 「コミュニケーション英語Ⅰ」のシラバスの研究
- 日常生活における身近な話題に関する英語運用能力向上への取組
- 英検 3 級レベルの語の発表語彙としての運用への取組
- Can-do リストの活用による指導と評価の一体化
- ICT を積極的に用いた授業改善への取組
- パフォーマンス評価の実施と評価観点の系統性の検証
- 外部試験（英検等）を用いた英語運用能力や参加状況の分析
- 研究校からの入学者の追跡調査（インタビュー，アンケート等）
- 拡大校内研究会や公開研究会への参加（含：小・中・高連携）
- 参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会の企画・運営

○平成 27 年度の進捗状況・課題

① 協議会・研修会等の進捗状況

- ・「南アルプス地区英語教育連絡協議会」を設置し，年間 5 回（4 月，8 月，12 月，1 月，2 月予定）開催し，研究校（小学校 2 校，中学・高校各 1 校）と関係機関（教育事務所，市内全 22 校英語担当者）の連携を進め，研究具体策について確認するとともに，全校にアンケートやレポートの提出を求め，研究に関わる電子データの情報共有を行い，各校への還流を推奨した。
- ・市内 22 校外国語指導者研修会や協議会の事前打合せ会を開催し，担当者のみではなく広く全教職員へ門戸を広げ，あわせて ALT（派遣会社）へも事業への協力要請と情報共有を進め，連携体制を推し進めた。

② 小学校の進捗状況

- ・研究校において小学校英語関係の全体計画・教育課程の再編成を行った。特に来年度から，研究校のみではなく，市内 15 の全小学校で教育課程に掲載し活用できるように「他教科と外国語活動との関連表」を作成した。（2 月 17 日電子データにて配付予定）
- ・研究校において，ALT や地域人材を活用した多様な授業スタイルの検証を行った。英語専科教員 2 名が小学校と中学校の授業に T1 や T2 として指導できたことや，地域人材の 2 名については，元中学英語教師と英語塾講師を任命することができ，違った角度からの児童生徒への支援を行うことが出来た。
- ・6 年生での教科型授業についての「読むこと・書くこと」に関する指導については，文部科学省の配付資料の活用や，6 学年児童と中学校 1 年生への「個人ホワイトボード」の配付を試行し，4 技能のバランスを重視した指導を行った。また中学生や高校生が，小学生へ英語版の絵本（有名な童話や小学校 2 年生の国語の教材「スイミー」）を読み聞かせ教材として活用した。小学生にとっては，英語に対するいい刺激になっていた。

- ・Can-do リストを活用するための学年間の系統化についての情報収集を行った。特に来年度から、研究校のみではなく、市内22の全小中学校で教育課程に掲載し活用できるように、「南アルプス市版 Can-do リスト（聞く・話す）」を作成した。（2月17日電子データにて配付予定）
- ・校内研究と研究開発との関連付けを行い、小中高の校種の教師を織り交ぜた、拡大校内研究会という形式での開催を全研究校で行った。形態としては「小・小」「小・中」「小・中・高」連携を行った。
- ・参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会参加を推し進めることができた。特に7月の「イングリッシュキャンプ」では、ALT とのグループワークの中で1日中英語の活動を楽しみ、12月の「クリスマスパーティー」では、高校生や中学生による英語での「絵本の読み聞かせ」を熱心に聞き、集団ゲームにも参加しとても盛況で、小学生の英語へのモチベーションは高まったように感じた。来年度以降も開催していく予定である。
- ・外部試験（英検等）の啓発を兼ねた中学校の学習会に、小学校の英語専科教師2名が参加し、来年度以降に開催予定の小学校での学習会の模擬演習を行った。
- ・研究校を中心に、児童生徒、教師、保護者に対してアンケートを行い、今年度の取組の総括と次年度以降の目標設定の参考資料とした。但し、研究校のみのアンケート集計だけではなく、市内全22校に少しずつアンケートの協力を依頼し、他地域との比較も参考とする中で、内容検討の資料とした。

③ 中学校の進捗状況

- ・教材教具の活用については、小中連携の中で議題にあがった、小学校で使用されている絵や文部科学省の小学校配付資料を中学校初期段階での活用することを行った。合わせて「4技能のバランスを重視」するために、生徒が4技能の中で一番定着がおぼつかない「書く能力」の底上げのために、「個人ホワイトボード」の活用にも、小中連携して力を注いだ。また英語版の絵本の読み聞かせ教材「スイミー」の活用も、イベントと合わせて行った。
- ・Can-do リストを活用するための学年間の系統化についての情報収集を行った。特に来年度から、研究校のみではなく、市内22の全小中学校で教育課程に掲載し活用できるように、「南アルプス市版 Can-do リスト（聞く・話す）」を作成した。（2月17日電子データにて配付予定）
- ・校内研究と研究開発との関連付けを行い、小中高の校種の教師を織り交ぜた拡大校内研究会という形式で、英語科の教職員を中心に行った。形態は「小・中、小・中・高連携」で行った。
- ・参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会参加を推し進めることが出来た。特に7月の「イングリッシュキャンプ」と12月の「クリスマスパーティー」は盛況で、中学生も小学生への英語での読み聞かせの際は、練習の成果が出せるか最初は緊張していたが、大きな絵本を上手に使って行っていた。中学生も高校生の読み聞かせを聞いているときは、新たな高い目標を感じていたようだった。来年度以降も開催していく予定である。
- ・外部試験（英検等）の啓発を兼ねた中学生を対象にした学習会を開催した。講師としては、中学校英語教師を中心に、小学校の英語専科教師2名、外部講師、教育委員会担当者が加わり、来年度以降に開催予定の小学校での学習会を見据えながら実施した。
- ・研究校を中心に、児童生徒、教師、保護者に対してアンケートを行い、今年度の取組の総括と次年度以降の目標設定の参考資料とした。但し、研究校のみのアンケート集計だけではなく、市内全22校に少しずつアンケートの協力を依頼し、他地域との比較も参考とする中で、

内容検討の資料とした。

- ・パフォーマンス評価を昨年度以上に取り入れた。今年度のデータを基に、来年度以降小学校で「英語科」を経験してくる新1年生へ活用していく予定である。具体的には生徒と教師が主な評価観点を共有し（生徒に事前配付）、自己評価へつなげられるようにし、更に観点表に学年毎の系統性を加味し、Can-do リストとの整合性を検証していく予定である。

④ 高等学校の進捗状況

- ・拡大校内研究会や公開研究会への参加を積極的に行った。特に12月17日に小中学校の教職員を対象に行った高校1年生の公開授業では、「英語表現」というカテゴリーの授業を公開し、高校での現状を示すことで、今後のそれぞれの校種での授業の参考となった。
- ・参加活動型のイベントを通しての児童・生徒間の交流会参加を推し進めることが出来た。特に9月の「高校生による小学校での出前授業」という新しい試みでは、小学生に英語への憧れを与えることができ、小学生の励みになった。また12月の「クリスマスパーティー」では、中学生と高校生が小学生へ童話の読み聞かせを英語で行った。ジェスチャーを交えた質の高い読み聞かせだったので、小中学生は食い入るように聞いていた。来年度以降も開催していく予定である。

（全体的な課題）

- ・英検等の外部試験の啓発活動を、保護者向けにもっと行う必要がある。どうしてもお金がかかることなので、保護者の許可を事前に得るためには、年間計画の配付も今後の課題である。
- ・南アルプス市の本事業予定では、小学校6年生は来年度も週1時間のみ「英語科」の予定であるが、ある程度の定着を想定するためには授業の間隔が空き過ぎる。そのため、授業数の増加や、モジュール形態の導入も視野に入れるべきかを検討することが、今後の課題である。
- ・高校生との連携を図るためのイベントを開催する際、どうしても設置者が違うため「派遣文書」や時には「保険への加入」や「輸送手段」を考慮しなければならない点が、今後の課題である。

（6）評価計画

平成27年度

小学校

- 実態調査アンケート（児童、教職員、保護者）
- 外部試験（英検等）
- Can-do リストの活用状況（授業観察）
- Web 上への研究成果の提示状況

中学校

- 実態調査アンケート（生徒、教職員、保護者）
- 外部試験（英検等）
- 山梨県学力把握調査（2年）
- パフォーマンス・テスト（評価）
- Can-do リストの活用状況等（授業観察）
- Web 上への研究成果の提示状況

高等学校

- 実態調査アンケート（生徒、教職員）
- 外部試験（英検等）
- コミュニケーション活動への積極性やインタビューテスト等のパフォーマンス評価

○語彙サイズに関するテストの実施

○平成27年度の進捗状況・課題

① 小学校の進捗状況

- ・実態調査アンケート（児童，教職員，保護者）は12月1日を基準日として研究校を中心に、更には研究校との比較対象として市内22校に少しずつ協力を仰ぎ、実施することができた。考察等を踏まえた詳細は、2月の最終協議会で全校に示し、来年度からの課題としたい。研究校の速報値としての小学校での大まかな考察としては、次の3点が挙げられる。
 - (i)（保護者）60%以上の保護者が、小学校での英語を好意的に捉えている。
 - (ii)（教師）授業中に児童が積極的に質問してくると感じている教師は35%以下である。
 - (iii)（児童）95%以上の児童が、英語の学習は大切だと考えている。
- ・今年度小学校では外部試験（英検等）の受験者はいなかったが、今後の保護者や児童に行った資格取得に関するアンケート集計（速報値）等を踏まえ、来年度以降は保護者への周知を含めながら啓発活動を行っていく予定である。
- ・今年度は県から示された Can-do リストを検証しながら授業を進めることが中心であったが、最終の協議会（2月17日）までには「南アルプス市版 Can-do リスト（聞く・話す）」を作成し、来年度以降は、市内全22校の教育課程に反映させていく予定である。
- ・Web 上への研究成果の提示状況について、協議会ごとにそのまとめや講師のPPTを市内全教職員が閲覧できる Web 上にアップし、還流活用または個人活用もできる体制作りを行った。

② 中学校の進捗状況

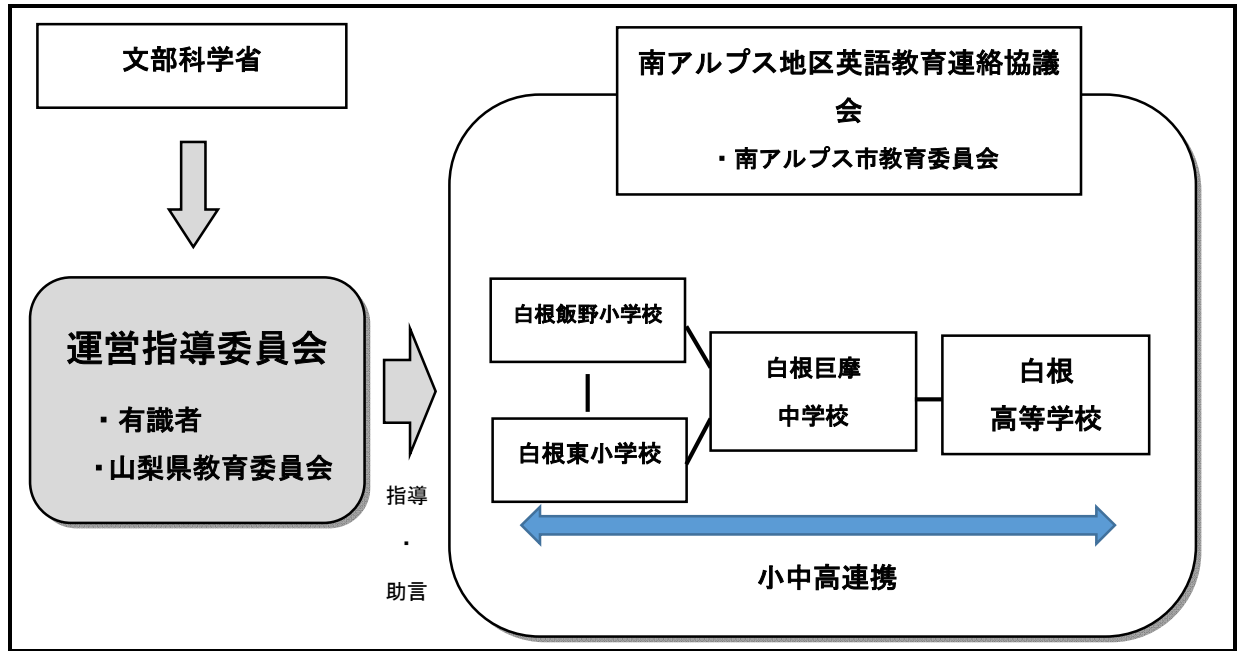
- ・実態調査アンケート（児童，教職員，保護者）は12月1日を基準日として研究校を中心に、更には研究校との比較対象として市内22校に少しずつ協力を仰ぎ、実施することができた。考察等を踏まえた詳細は、2月の最終協議会で全校に示し、来年度からの課題としたい。研究校の速報値としての中学校での大まかな考察としては、次の3点が挙げられる。
 - (i)（保護者）もっと英検等を受験させたいと、60%以上の保護者が考えている。
 - (ii)（教師）95%以上の教師が、小学校の英語が中学校で役立つと感じている。
 - (iii)（生徒）65%以上の生徒が、まだ資格取得意識が低いようである。
- ・今年度、中学校では外部試験（英検）を中心に行ったが、保護者や生徒に行った資格取得に関するアンケート集計（速報値）等を踏まえ、来年度以降は保護者への周知を含めながら啓発活動を行い、まずは受験者数の増加を図っていく予定である。
- ・今年度は県から示された Can-do リストを検証しながら授業を進めることが中心であったが、最終の協議会（2月17日）までには「南アルプス市版 Can-do リスト（聞く・話す）」を作成し、来年度以降は、市内全22校の教育課程に反映させていく予定である。
- ・Web 上への研究成果の提示状況について、協議会ごとにそのまとめや講師のPPTを市内全教職員が閲覧できる Web 上にアップし、還流活用または個人活用もできる体制作りを行った。

（全体的な課題）

- ・資格取得の機会を、いかに保護者や児童生徒に周知し、まずは受験母数の増加を来年度以降計画的に行うかが課題である。
- ・アンケートについては、経年比較を前提に来年度以降も基準日（12月1日）や内容を継続してデータ化し、現実的な目標設定等がいかに役立てていくかが課題である。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

<p>○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（4月30日木曜日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度の取組内容、計画についての説明会開催。 <p>○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催 （10月15日木曜日 「山梨県英語フォーラム」）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、ポスターセッション形式で研究校が研究計画を発表する。運営指導委員会が研究校の発表内容について指導・助言。 <p>○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催 （2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各強化地域拠点が、1年間の取組の成果と課題を報告する。運営指導委員会は、報告を踏まえ、次年度に向けて指導・助言。 <p>○平成27年度の進捗状況・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（10月15日木曜日 「山梨県英語フォーラム」）については、第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているかを県下各地からの参加者に説明するためにポスターセッション形式で発表した。また文科省から、教科調査官も来県していただき、貴重な講演を拝聴し、今後の参考となった。 ・第3回山梨県英語教育強化推進委員会（2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」）ではアンケート集計からの考察や、Can-doリストの検証、更には小学校における「他教科との関連表」や中学校における「小学校外国語との英語授業の関連表」等の今年度の成果物を踏まえて提示していく予定である。 <p>（全体的な課題）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中高の連携の中で、全校種において研究授業ができたことは今後も継続していきたい。 ・7月下旬の「イングリッシュキャンプ」、9月上旬の「高校生出前英語授業」、12月下旬の「クリスマスパーティー」等、今年度の英語イベントは継続発展させていきたい。そのための事前打合せ等の時間を確保し、新しいアイデアを考えられるかが、今後の課題である。 ・1年目は目標等の数値化が難しかったが、2年目からは経年比較を活用し、数値による検証をいかに取り入れていくかが、課題である。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<p>4月23日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南アルプス地区英語教育連絡協議会（準備会） ・市内22校外国語指導者研修会（1） <p>・各研究校 校内研修会（事業説明）</p> <p>4月24日：白根百田小 4月27日：白根源小 4月30日：白根巨摩中</p>	<p>○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（4月30日木曜日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度の取組内容等について、委員会からの説明を受けて、研究計画の充実を図る。

5月	<ul style="list-style-type: none"> 各研究校校内研修会（位置付け，計画確認，校内組織作り） 5月20日：白根東小 5月26日：白根飯野小 市内22校外国語指導者研修会（含：ALT，地域人材）② （事業説明と市内関係機関の協力体制の確立） 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> 各研究校 校内研修会（指導主事招聘：施策の今後の展望） 外部試験（英検等）実施 	
7月	<p>7月8日</p> <ul style="list-style-type: none"> 小・中・高授業交流会（白根飯野小学校：5年） <p>7月27・28日</p> <ul style="list-style-type: none"> イングリッシュキャンプ実施（小・中・高の交流会） 	
8月	<p>8月20日</p> <ul style="list-style-type: none"> 南アルプス地区英語教育連絡協議会（2） （1学期の振り返りと2学期の活動計画の確認～PDCA） 市内22校外国語指導者研修会（含：ALT，地域人材）③ 	
9月	<p>9月3日</p> <ul style="list-style-type: none"> 「高校生の英語出前授業」（白根東小学校：6年） <p>9月28日</p> <ul style="list-style-type: none"> 小・中・高授業交流会（白根巨摩中学校：1年） 外部試験（英検等）に向けての学習会 	
10月	<p>10月15日</p> <p>「山梨県英語フォーラム」の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ポスターセッション形式で研究校が取組を発表。27年度は小学校研究校が発表する。参加対象は県下全ての小・中・高。 外部試験（英検等）実施 	<p>○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（10月15日木曜日「山梨県英語フォーラム」）</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているか，明らかにし，ポスターセッション形式で研究校が研究計画等を発表する。 研究校は，運営指導委員会から指導・助言を受ける。
11月	<ul style="list-style-type: none"> 小・中・高授業交流会（高校：教職員向け）→12月へ 市内22校外国語指導者研修会（含：ALT，地域人材）④ （事業の報告と他校での実施協力体制の確認）→分散開催 	

12月	<p>12月1日（基準日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市内全22校でアンケート調査 <p>12月17日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高授業交流会（高校1年授業公開） ・協議会，イベント事前打合せ会 <p>12月25日（15：30～）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南アルプス地区英語教育連絡協議会（3） （2学期の振り返りと3学期の活動計画の確認～PDCA） （アンケートの内容項目の確認・実施） ・参加型イベントの開催（小・中・高の児童・生徒の交流会） →クリスマスパーティーの開催（12月25日13：00） 小学生29人，中学生9人，高校生4人，ALT10人 スタッフ（小2，中2，外部2，教委6） 	
1月	<p>1月20日</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全体会（授業公開・講演会 白根東小学校：6年） ・公開授業の実施（兼第4回連絡協議会の実施） ・講演会（大学教授等の招聘） ・市内22校外国語指導者研修会（含：ALT，地域人材）⑤ ・外部試験（英検等）実施 ・アンケートの集計・考察 	
2月	<p>2月9日</p> <p>「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強化地域ごとに取組成果を発表。参加対象は県下全ての小中高等学校。 ・市内22校外国語指導者研修会（含：ALT，地域人材）⑥ （事業の報告と他校での実施協力の報告） ・各研究校 校内研修会（年間のまとめ） （指導主事招聘：来年度への展望） <p>2月17日</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南アルプス地区英語教育連絡協議会（5） ※1年間の振り返りと2年目に向けて活動計画の確認 ※アンケート集計，考察の提示 ※来年度への課題，要録等の表記例等の提示 ※Can-doリスト，他教科関連表，小中関連表等の提示 	<p>○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究校は，1年間の取組の成果と課題を報告する。 ・研究校は，運営指導委員会から次年度に向けての指導・助言を受ける。
3月		
【その他の取組】※あれば記入		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 山梨県教育委員会
 所 在 地 山梨県甲府市丸の内1-6-1
 代 表 者 職 氏 名 教育長 阿部邦彦

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	やまなしけんりついちかわこうとうがっこう	ふりがな	たんざわ きみひこ
学校名	山梨県立市川高等学校	校長名	丹沢 公彦
ふりがな	いちかわみさとちようりついちかわちゅうがっこう	ふりがな	わたい わたる
学校名	市川三郷町立市川中学校	校長名	渡井 渡
ふりがな	いちかわみさとちようりついちかわしょうがっこう	ふりがな	あおやぎ かずひこ
学校名	市川三郷町立市川小学校	校長名	青柳 和彦
ふりがな	いちかわみさとちようりついちかわひがししょうがっこう	ふりがな	むかひ まさかつ
学校名	市川三郷町立市川東小学校	校長名	向井 眞勝

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

英語によるコミュニケーション能力を育成するため、小学校における英語教育の早期化と教科化及び中・高等学校における目標・内容の高度化や指導・評価の改善に取り組み、小・中・高の一貫した英語教育の指導体制充実を図る。

(2) 研究の概要

小学校における英語教育の早期化のため、現在5, 6学年で行われている「外国語活動」を3, 4, 5学年で実施し、内容や指導、評価等の研究を行う。2年目からは、3, 4学年で行う。また、小学校6学年において、それまでに学習した「外国語活動型」を「教科型」に発展させる研究を行い、「教科型」授業を実施する。2年目からは、5, 6学年で行う。「教科型」の英語教育を受けた生徒が入学する中・高等学校では、教育目標・内容の高度化及び指導・評価の改善、教育課程の編成に取り組む。

小・中・高の系統性を考えた到達目標を、4技能に係る一貫した具体的な指標（CAN-DO リスト）として示し、パフォーマンス評価など、4技能の総合的な評価方法について研究する。また、小・中・高の連携した取組が行えるように、協議会を設置して相互の授業公開や研究会、研修会を計画、実施する。

（3）現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

本町は、甲府盆地の南西部、南アルプスを源流とする釜無川と秩父山系を源流とする笛吹川の合流地点、富士川の出発点に位置している。歴史を今に伝える文化施設、花火・和紙・印章などの地場産業、肥沃な土地を生かした農作物など、歴史と文化と豊かな自然に恵まれた地域である。また、1990年（当時の市川大門町において）米国マスカティーン市と姉妹都市締結が交わされ、以来、姉妹中学校生徒のホームステイを中心とした相互派遣交流事業も続いている。社会環境が国際化されていく中、これからの時代を生きていく子供たちにとって、派遣団による交流は貴重な経験となっている。

研究校の2小学校（市川小学校、市川東小学校）児童の多くが市川中学校に進学し、その多くが「英語科」を設置する市川高等学校に進学している。いずれも小規模校ながら、地域とともに歩み、地域に根ざした教育活動が推進されている。

このような地域の特性を十分生かしながら、児童生徒の実態に合った一貫性のあるカリキュラムづくりと到達目標の設定、及び教材開発を行うことにより、グローバル化する社会に対応できる人材の育成に資する研究を進めていきたい。

【小学校】

市川東小学校は、児童数12名の極小規模校であるが、他校と兼務のALTが週1日勤務し、5、6学年の外国語活動及びワールドタイム（1～4学年対象/月1回）の指導にあたっている。

市川小学校では、平成21年度よりALTが常勤しており、1～4年生には言語・文化理解を目的とした英語教室、5～6年生は外国語活動を行うなど、児童が英語に触れる機会を多く設けてきた。その結果、英語を話すことに対する抵抗感は薄れてきている。今後は、英語への「慣れ親しみ」から「英語を使ったコミュニケーション能力の育成」に向けた指導の工夫改善が求められる。また、コミュニケーション能力の素地を養うため、小中の連携を十分に視野に入れた教育課程編成と学習環境の整備も課題の一つと考えている。

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画に基づき、ALT常勤という恵まれた教育環境を最大限に活用し、児童生徒の英語力向上に向けて小・中・高の系統的なカリキュラム作成を行うこと。また、中学校、高校につなげるための指導内容や評価方法についても研究を深めたい。

【中学校】

小学校外国語活動を通して英語に慣れ親しんできた生徒たちは、中学入学後も英語の授業に積極的に取り組んでいる。特に「話すこと」は、外国語活動の経験を持たない生徒に比べ、自信を持って取り組んでおり、「聞くこと」についても理解力の向上が感じられる。こういった小学校外国語活動の成果が見られる一方で、「書くこと」「読むこと」については、多くの生徒が難しさを感じ、苦手意識を持ってしまふということも事実である。生徒が、自立した英語学習者となるよう、学習の仕方についての指導・支援も必要であると考えている。

小学校での英語教育の成果を把握し、課題をクリアしていくためには、小中の連携が不可欠である。英語に関する実態についての情報交換、小学校教科型英語を踏まえた学習到達度目標の作成、共同学習

教材の開発と実施，教員相互の授業参観，児童生徒の相互参観及び交流学习，中高英語担当教員の出張授業などが必要であると考え。グローバル化に対応した英語教育改革実施計画に基づき，児童生徒の英語力向上に向けて小・中・高の系統的なカリキュラム作成を行うこと。また，高等学校につながるための指導内容や評価方法についても研究を深めたい。

【高等学校】

今年度，創立 100 周年を迎えた伝統校である。昭和 63 年に英語科が設置されて以来，普通科との 2 学科編成となっている。英語科では，英語が 1 週間に 10 時間前後設定され，英語の学力の向上と国際的視野を持った生徒の育成を目指している。

小・中・高の系統性を踏まえ，十分な連携を図りながら，教育目標・内容の高度化と着実な定着を実現するための指導計画と CAN-DO リストの作成，検証，改善を進めていきたい。

②研究仮説

小・中・高を通して，児童生徒の実態に合った一貫性のあるカリキュラムづくりと到達目標の設定，及び教材開発を行うことにより，グローバル化する社会に対応できる人材の育成につながるであろう。

【小学校 3，4，5 学年（2 年次以降は 3，4 学年）】

- 「Hi, friends!」を活用し，外国語（英語）を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで，「言語や文化についての体験的な理解」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成を図る。コミュニケーション能力の素地が養われるとともに，ことばへの関心も高まると考える。
- ・週 1 コマの外国語活動を設定する。
- ・教科型英語への接続を視野に，CAN-DO リストの作成と「読む・書く」を意識した教材開発を行う。

【小学校 6 学年（2 年次以降は 5，6 学年）】

- 外国語活動で身に付けた英語への「慣れ親しみ」，「言語や文化に関する気付き」，「コミュニケーションに対する積極的な態度」等を踏まえ，「読むこと」「書くこと」を加えた 4 技能について系統性のある学習を行うことで，コミュニケーション能力の基礎を養うことができると考える。
- ・教科型英語の時間を設定する。1 年次は小学 6 年生で週 1 コマ，2 年次は小学 5，6 年生で週 2 コマ，3 年次は 3 コマの授業を行う。
- ・中学校との系統性を踏まえた指導計画及び CAN-DO リストを作成する。
- ・中学校との連携を意識した教材開発を行う。
- ・「読むこと」「書くこと」の指導法と 4 技能の評価方法の研究を行う。

【中学校英語科】

- 授業は英語で行うことを基本とし，小学校で育成されたコミュニケーション能力を踏まえ，互いの考えや気持ちを英語で伝え合うコミュニケーション活動を重視する。身近な話題についての理解や表現，簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養うことができると考える。
- ・小・中・高の系統性を踏まえ，教育目標・内容の高度化と着実な定着を実現するための指導計画及び CAN-DO リストを作成する。
- ・小学校との連携を意識した教材開発を行う。

【高校学校英語科】

○小中学校で育成されたコミュニケーション能力を踏まえ、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に体験することで、情報や考え方などを的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を高めることができる考える。

- ・小・中・高の系統性を踏まえ、教育目標・内容の高度化と着実な定着を実現するための指導計画の作成を行う。
- ・小・中・高の系統性を踏まえた CAN-DO リストの検証、改善を行う。
- ・小中学校における研究開発の内容を踏まえた教育内容の開発を行う。

③研究成果の評価方法

- ・児童生徒の英語に関する実態把握調査を行う。変容を見取るために定期的実施する。
- ・CAN-DO リストに沿った到達度を測るテスト（パフォーマンステスト・独自作成テスト）を実施する。
- ・山梨県学力把握調査（中学2年生）、全国標準学力検査（NRT）による英語学力の調査と分析及び経年比較を行う。
- ・外部試験（中学2年生）による英語力の調査と分析及び経年比較を行う。

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3, 4, 5 学年 1 コマ	第3, 4 学年 1 コマ	第3, 4 学年 1 コマ
②小学校 教科型	第 学年 コマ	第6 学年 1 コマ	第5, 6 学年 2 コマ	第5, 6 学年 3 コマ (1 コマはモジュール)

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次

○英語教育強化地域拠点小・中・高連絡協議会（仮称）を設置し、小学校、中学校、高等学校が連携して、具体的な指導体制づくりの準備と研究を進める。

【全体】

- ・講師を招聘しての学習会
- ・小中、中高での児童生徒や指導内容に関する情報交換（年度末）
- ・小・中・高における相互授業視察
- ・中学校（高校）英語科教員による小学校（中学校）での出前授業
- ・ALT の効果的な活用
- ・Classroom English の共通化（小・中・高の連携）

<平成27年度の進捗状況・課題>

○第1回学習会は県の指導主事を招聘して、第2回学習会は大学教授を招聘して、外国語活動及び英語科

の授業のあり方等について学習会を行った。今、大きく変化している英語教育の動向や具体的実践について広く学ぶことができた。これまでの授業づくりの観点から大きく視点を切り替えた研究等について、実践的な助言をいただくことができた。特に小学校においては、担任主導の授業づくりを進めるにあたり、指導者が「Hi, friends!」で扱われているすべての単語の発音をマスターすることが大事になってくることを御示唆いただいた。そうした英語力の向上が授業者の自信となり、授業改善にもつながっていくと考える。日々の授業実践の積み上げや研修の充実も視野に今後の研究に生かしたい。

- 県指導主事や大学の講師を招いての学習会は小学校,中学校,高等学校が研究の方向と研究の柱を共有し確認するためには必須の研修であった。今後も研究を推進するためにも継続していく必要がある。
- 児童生徒に関する情報交換は、3月末に行う予定である。指導内容については今後、連携を考えた授業づくりを進めていく上でも定期的に情報交換をする必要がある。また、市川小学校、市川東小学校から市川中学校に入学してくる生徒については、英語学習への意欲のみならず、6年生までの学習状況について情報交換を密にし、中学校の指導と支援に生かさなければならぬと考える。
- 小中においては、小学校の学校開放日、中学校の生活参観週間をはじめ、普段でもお互いの学校を訪問し授業を参観する機会を持った。中高においても高校から中学校へ2度の視察を行った。また、中学校から高校については、高校の授業風景を録画して中学校教師が視聴する取組を行った。相互に授業参観をすることで、連携においてどのような授業づくりを進めていけばよいかを考える上で参考になるものが多く見つかった。例えば中学校では、授業の冒頭で月日や曜日を確認しているが、小学校でも同様のスタイルで授業を行うことによって、中学校の授業とのつながりを促すことができる。お互いの授業を見合うことで、そうした連携の糸口が見つかってくると感じた。
- 中学校から小学校へは計6回授業視察に赴いた。4、5年生の外国語活動及び6年生の英語の授業をそれぞれ観察することによって、授業のねらい、それに基づく学習活動の組立て、指導と支援の工夫を学ぶ機会となった。来年度の中学校の指導計画及び指導内容の具体に生かしていきたい。
- 12月に、中学校教員による小学校6年生3クラスへの出前授業を実施した。外国語活動で学習した表現を使用して、児童が中学校の授業を意識できるような授業内容を構成した。児童も、非常に楽しく授業を受けることができたのと同時に、小中の連携を考えた授業づくりに生かせる内容を得ることができた。特に小学校教科型の課題である「書くこと」については、本時の学習内容と「書くこと」との関連や展開方法について学ぶ点が多々あった。また、文法的なつながりについても説明し、児童にとっては中学校への発展を意識することができた。小学校においても中学校においても連携を意識した意図的な授業の組立てが必要になると感じた。高校英語科教員による中学校2年生3クラスへの出前授業も12月に実施することができた。児童・生徒にとってはどのような英語の学習が中学生、高校生になったら行われるのかを体験的に知ることができるとともに、英語学習の意欲を高めたり、新たな動機づけにつなげたりする機会となった。来年度も継続して、出前授業を実施していきたい。
- 市川東小学校は極小規模の学校であり、ALTの配置も週1日であることから、校内の指導・研究体制の充実や日常的なALTとの連携による授業づくり等に難しさを抱えているが、小小連携を進める中で、市川小学校と同様の内容で指導実践を行う努力をしてきた。市川小学校の研究授業を参観したり、校内研究会等に参加したりして、市川小学校の授業実践を極小規模校の実態に合わせた指導内容に変えて指導を行った。また、中学校英語科教員による小学校での出前授業を市川小学校において合同で受けることもできた。普段は少人数で学習をしている子供たちであるため、最初は緊張した面持ちだったが、授業の後半では発音の声も大きくなり、中学校の英語授業の雰囲気を感じることができた。
- 市川小学校では、全ての授業をALTとティームティーチングで行った。HRTの役割とALTの役割をお互いにきちんと認識して授業に臨めるようになってきたことは積み重ねの成果である。特に、英語科

におけるフォニックスの発音指導を ALT にしてもらったことは、ネイティブの発音を聞くことができ、児童の音声理解に有効だった。課題となるのは HRT と ALT の打合せ時間を確保することである。互いの役割を明確にして授業に臨むためには打合せが大事になるが、その時間をつくりだすことが大変難しく、始業前のわずかな時間を活用するなど苦労した。次年度には授業数が増えることもあり、時間確保がより困難になることが予想されるため、更なる工夫を図ると同時に人的配置の改善を望みたい。

- 市川中学校では、ALT の効果的な活用については、モデルリーディングやデモンストレーションだけでなく、言語活動の中で様々な役割を担ってもらっている。机間指導や支援も常に行ってもらっている。パフォーマンステスト（インタビュー）の評価の補助や英作文の添削なども担当している。事前の打合せの時間がない中で授業実践が続いていることが課題であり、授業改善を進めるためには時間の確保が不可欠である。
- 市川東小学校では、「Hi, friends !」のデジタル教材を使用してアルファベットの発音指導を行っているが、ALT による発音指導と重複する点に課題を感じている。デジタル教材を使用して指導する場面と ALT によって指導する場面について、それぞれの指導を効果的にするにはどうしたらよいか今後検討していきたい。
- 市川小学校では、ALT を講師に教員を対象とした英語研修を毎週 1 回の実施してきた。教師の英語力向上に大変役立つ機会となった。
- 市川高校では、プレゼンテーションやスピーチ等の言語活動時に ALT の効果的な活用を行い、成果をあげることができた。
- 小・中・高の授業で使用される Classroom English を持ち寄り、それを一覧にして小・中・高で確認した。小・中・高が共通の Classroom English を使用することで、中学校や高校へ進学する児童・生徒がスムーズに英語の授業を受けることができる手立てになると考える。また、担任ができる限り英語を使って授業を進めようとする意識を高めることにもつながっていききたい。今後は、使用する Classroom English の系統性を見直しや確実な活用につなげていくことが課題となる。
- 中学校では、Classroom English について小学校の外国語活動及び英語の授業の中での活用状況を把握し、整理している段階である。中学校の学習がスタートする時点から、言語活動の中で教師の発話そのものが言語活動を担う大きな役割を果たしていることを認識し、活動の指示や説明、導入や展開の中でのオーラルインターアクションなど、学年ごと、単元ごと、段階的に高度化していくことが中学校では求められている。高等学校でのオールイングリッシュの授業に対応できる生徒を育てることを意識し、授業の工夫と改善に努める必要がある。

【小学校】

〈全体〉

- ・児童、保護者、指導者の意識調査
- ・英語教育に関する保護者への情報発信（お便り、学校開放日、授業参観など）
- ・教員対象英語研修（Classroom English や英会話）
- ・研究開発校への視察
- ・小小における交流授業

〈平成27年度の進捗状況・課題〉

- 第1回意識調査は9月に3年生～6年生を対象に行った。その結果、「英語が好きか」等の問いに対して、中学年ではおおむね良好な回答が得られているが、高学年になると不安や難しさを感じる児童が増

えてくることがわかった。児童の意欲を高める授業の必要性を感じる。第2回を1月中に行う予定である。

初年度ということもあり、拠点校全体で共通質問項目の検討を行い実施したため、第1回が遅い実施になってしまった。第2回の調査結果から、調査対象者の変容を見て今後の指導に生かしたい。

- 児童、保護者、指導者の意識調査を行うことにより、児童や保護者の英語教育への意欲や期待の高さを知ることができたことは有意義であった。
- PTA 総会や学校だよりを通して、本事業の説明や本校の英語教育への取り組みについて情報発信した。また、授業参観や学校開放日には外国語活動や英語科の授業を行い、多くの保護者に参観してもらった。また、学校開放日には中学校の教員も参加し、児童の様子や授業の内容などを参観してもらった。
- 毎週金曜日に ALT による英語研修を行った。日常英会話をはじめ、Classroom English に特に力を入れて研修を行った。毎週行うことで、指導者自身の英語運用能力の向上に役立っているのと同時に、英語を積極的に話そうという前向きな姿勢が見られるようになった。
- 11月に本事業の拠点校である秋田県由利小学校への視察を行った。市川中、市川小、市川東小の3校の担当で視察をした。授業の様子や校内掲示等の様子から、全職員が一丸となって研究に取り組み、素晴らしい実践をされていることがわかった。本研究を進める上でそうした職員の一体感が重要であり、環境づくりや教材開発などでも生かすべきことがたくさんあった。大変参考になる充実した研修視察となった。
- 小小交流については、高校との交流事業である市川小の芸術鑑賞教室に市川東小学校の児童も参加し、英語によるミュージカルや合唱を鑑賞した。また、中学校英語科教員による出前授業を行う際に、市川東小学校児童が市川小の授業と一緒に参加し、授業を受けた。今後も継続して、交流授業を計画していきたい。

〈3, 4, 5 学年〉

- ・指導計画の作成と実践・検証・改善
- ・CAN-DO リスト（学習到達目標）の作成
- ・Hi, friends!（デジタル教材含む）の活用
- ・Hi, friends! の文科省の指導案を基に児童の実態に合わせた独自の指導案の作成と活用
- ・高学年の英語科につながる「読む・書く」を意識した教材開発
- ・「聞くこと」「話すこと」の指導法の研究と実践・検証・改善

〈平成27年度の進捗状況・課題〉

- 3・4年生では、市川小学校独自の指導案に加え、Hi, friends!1の最初の3単元を児童の実態に合わせて、指導内容を変更して授業実践を行った。Hi, friends!1の内容は大変充実したものであり、動画などは児童の興味関心を引くものであったが、内容的に高度なものもあり、そのまま使用するのは困難であることが明らかになった。今年度の反省を基に、3学期中に更に改善を加えた指導計画を作成し、次年度に生かしていきたい。
- 本年度は、山梨県のCAN-DOリストに沿ったものを市川小のCAN-DOリストとした。今年度のCAN-DOリストの達成状況をかながみて、来年度のCAN-DOリストを改善していきたい。「活動型における態度面の重視」と「CAN-DOリストによるできることの評価」との関係性を考え、バランスを取っていくことは今後の大きな課題である。
- 「読む・書く」を意識した教材開発については、文字を含む絵カードを積極的に使用した。また、文字

カードを用い、文章を視覚的に提示した。活動の際に、児童はその文字カードを頼りに発話する様子が見られることから、文字の提示が児童の理解を促すのに有効であると感じた。

- 「聞くこと」「話すこと」については、授業実践を行う中で、音声や基本的な表現に慣れ親しむことが大変重要であることが明らかになってきた。来年度は、話すための技能を高めるために、音声や基本的な表現の大量のインプットとともに、コミュニケーションにつなげるための、慣れ親しむ活動を多く仕組むことを心がけて授業づくりを行いたい。
- 市川東小学校では、3・4年生については初めての外国語活動型の授業実践であったが、今までALTによる「World Time」（国際交流の時間）で、英語文化圏の活動やゲーム等を楽しんできた経験があったので、外国語活動の授業に興味を示し、楽しく活動する姿が見られた。少人数のため、一人ひとりが英語を聞いたり、話したりする活動時間が長くとれ、集中して取り組むことができている。

〈6学年〉

- ・CAN-DO リスト（学習到達目標）の作成
- ・中学校の使用教科書と文科省補助教材の内容（含取り扱う単語）の系統性を整理した指導計画の作成と実践・検証・改善（中学校と連携）
- ・文部科学省補助教材の活用
- ・中学校との連携を意識した教材（音と文字の関連性への気づきを促すような教材）の開発
- ・「読むこと」「書くこと」の指導法の研究と実践・検証・改善
- ・4技能の評価方法についての研究と実践・検証・改善
- ・独自テストの作成・実施とパフォーマンステスト（Speaking）の実施

〈平成27年度の進捗状況・課題〉

- 3～5年生と同様に、本年度は、山梨県のCAN-DO リストに沿ったものを市川小のCAN-DO リストとした。今年度のCAN-DO リストの達成状況をかんがみて、来年度のCAN-DO リストを改善していきたい。CAN-DO リストは中学校へのつながりと、全員が達成できる水準を念頭において作成してあるが、高学年では個人差が広がってくることから、そのあたりへの十分な配慮が必要になる。内容の妥当性も含めて今後検討していきたい。
- 中学校の使用教科書とHi, friends! (1・2・Plus) で扱われている言語材料を比較した結果、Hi, friends! で取り扱う言語材料のほとんどが中学校1年生の使用教科書で扱われていることがわかった。英語で語句の指導を行う際に、絵が主体のカードから文字が主体のカードへと少しずつ移行させた。フォニックス指導を行う際に、いくつかのアルファベットをまとめて復習するときには、文字のみのカードを使用した。今後も継続して、有効な教材及びその活用法について研究していくことが必要である。
- 今年度は教科型の研究の初年度ということもあり、評価方法については試行錯誤を繰り返し、検討を重ねてきた。中学校の評価方法を参考にしたが、今後も継続して検討が必要である。今年度「書くこと」については、授業の冒頭にモジュール的な「帯活動」として位置付けてきたが、Hi, friends! Plus とは別に授業内容に関わった「書くこと」のあり方も模索していきたい。授業づくりとも大きくかわる問題だが、指導法や教材、評価方法について考える上でも、また、来年度の年間指導計画を作成する上でも、中学校のものを参考に、連携して研究を進めていきたい。書くこと・読むことにスムーズにつなげられるような指導計画を作成していきたい。
- Hi, friends! Plus のデジタル教材を活用して、アルファベット指導とフォニックス指導を行った。Jingle を使用する前に、フォニックス指導に力を入れ、Jingle に有効につながる指導内容を構成した。ワーク

シートについては、デジタル教材と連動して活用できる部分もあったが、すべてが連動していると更に活用しやすいと感じた。

- 6年生については、アルファベット指導を始める前に、アルファベットを書くテストを実施した。大文字は日常生活でも目にすることが多いこともあってか予想以上に定着が図れていたが、小文字は難しく、特に正確に書くという点で課題があることがわかった。3月には、2回目のアルファベットテスト（1回目と同様のもの）を実施し、指導後の児童の変容をみたい。また、同じく3月には、CAN-DOリストに沿った内容のSpeakingテストを実施する予定である。
- 市川東小学校6年生の教科型の授業実践では、「書く」活動が入ってくることで子供達の英語に対する意欲の低下を心配したが、デジタル教材を使ってアルファベットの書き順を見ながら書く活動等を行うことによって、逆に中学校の英語授業を意識することができ、集中して授業に取り組むこともできている。

【中学校】

- ・生徒、保護者、指導者の意識調査
- ・小学校教科型英語の実施を踏まえたCAN-DOリスト（学習到達度目標）の作成と指導計画の作成（小学校との連携）
- ・使用教科書を用いて、小学校で扱われた語や表現等を中学校でどの場面で扱い、スパイラルに何度も扱い直すことができるかの検討。
- ・高等学校の使用教科書の内容との系統性を整理した指導計画の作成。
- ・地域に伝わる民話などを扱った教材の開発。
- ・「英語の授業における英語使用量の増加」を目指し、指導者の英語力向上を図るため、小中学校英語担当教員、ALTとの研修。
- ・独自のテストの作成と実施。
- ・CAN-DOリストに沿ったパフォーマンステスト（書くこと・話すことに重点を置くもの）実施。
- ・小学校外国語活動及び外国語の授業観察、高等学校の外国語の授業観察。
- ・小中、中高での児童生徒の英語に関する実態についての情報交換。
- ・小中間、中高間での交換授業の実施。
- ・研究開発校への視察

＜平成27年度の進捗状況・課題＞

- 研究のスタートとして初年度に生徒、保護者、指導者の意識調査を実施し、経年でその推移を分析し、授業改善に生かしていくことが研究開発を担うこの事業の基本として捉えた。生徒の実態は今年度の9月の状況では、英語が好きな生徒1年60%、2年48%、3年43%となっている。英語に対する苦手意識は学年が上がるにつれて数値が上がる傾向にあるが、この結果をどのように実際の授業改善につなげるかが課題である。「どちらとも言えない」と答えた生徒の変容を把握していきたい。今年度は短いスパンではあるが、1月に同様の調査を実施し、結果を分析していきたい。
- CAN-DOリストについては県で作成された版をモデルとして今年度はスタートした。実際に研究と実践を積み上げる中で妥当性を検討していきたい。中学校では来年度から教科書が改訂されることに伴って、指導計画の作成を並行して進めているところである。
- 小学校のHi, friends!の指導計画、指導内容、5,6年生の英語の指導計画と指導内容を吟味精査する時間がとれない現状ではあるが、3学期までには小学校で扱われた語彙、表現等を確認し、中学校のどの単

- 元でどのようにスパイラルに扱うことができるかを検討し、指導計画に反映させていきたい。
- 市川高等学校の使用教科書と膨大なシラバスも実際に見ているが、系統性を整理した指導計画の作成についてはまだ取り組めていない状況である。
 - 地域に伝わる民話などを扱った教材の開発については、ALT の協力を得て「四尾連湖の雨乞い」の物語の英訳に取り組み、実際に教材化できるか検討しているところである。中学校の教科書題材とは別に扱う計画を考えていかなければならない。また地域の題材が教材化できるかについても、小学校の生活科、社会科、総合的な学習の時間など教科横断的なシラバスとの連携を図り、小学校と中学校で一緒に取り組まないとい具現化は難しいと考える。
 - 「英語の授業における英語使用量の増加」を目指し、指導者の英語力向上を図るために研修を活用するなどして自己研鑽に励んでいるところである。また、校内の英語科担当教師が相互に授業観察をすることによって、互いの英語力とともに授業力の向上を目指している。
 - CAN-DO リストに沿ったパフォーマンステストを各学年とも 1, 2 学期に 2 回実施し、3 学期に 1 回計画している。主にリーディングテスト、レンターション（暗唱）テスト、Speaking（インタビュー）テストを実施している。
 - 独自のテストの作成と実施については各学年の定期テスト計 5 回は指導計画と指導内容に沿って実施し、すべて独自に作成したものである。定期テストには書くことについてのテストも含まれている。また、各学年とも外部の標準テストも年間 3 回以上実施し、客観的な到達度の把握に努めている。今年度はさらに CRT を 1, 2 年生で実施し、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの学習状況を経年で比較していくこととした。今年度は、特別に 2 年生は GTEC を実施した。いずれも結果の分析と検証は 3 学期に行う。
 - 中学校からは小学校へ計 6 回授業視察に赴いた。4, 5 年生の外国語活動及び 6 年生の英語の授業をそれぞれ観察することによって、授業のねらい、それに基づく学習活動の組立て、指導と支援の工夫を学ぶ機会となり、来年度の中学校の指導計画及び指導内容に生かしていきたい。
 - 小中間、中高間の交換授業の実施については、市川中学校から市川小学校への出前授業は 12 月に 6 年生の 3 クラスを訪問し、市川高校から市川中学校への出前授業は 2 年生の 3 クラスで実施した。児童・生徒たちにとってはどのような英語の学習が中学生、高校生になったら行われるのかを体験的に知ることができるとともに、英語学習の意欲を高めたり、新たな動機づけにつなげたりする機会となった。特に中学校では 2 名の高校生が同行して授業に参加し、実際に暗唱や弁論を発表してもらい、中学生にとって大きな刺激となった。
 - 研究開発校への視察は、11 月に秋田県由利本荘市立由利小学校を訪問し、実際の授業を見学するとともに研究の全体計画、研究の経過について説明を詳細に聞くことができた。教員の研究への意識の高さ、小・中・高・大との相互連携、県及び市教育委員会のサポートなど様々な視点から学ぶことができた貴重な視察となった。

【高等学校】

- ・生徒、保護者、指導者の意識調査
- ・英語科を核とした本事業の推進
- ・CAN-DO リスト（学習到達度目標）の作成と指導計画の作成（中学校との連携）
- ・小中高での相互授業観察
- ・小中高での生徒の英語に関する実態について情報交換

＜平成27年度の進捗状況・課題＞

- 9月に生徒（1学年143名）、1学年保護者、指導者（英語科教員6名）を対象に意識調査を実施した。「英語が好きか」の問いに対して、およそ半数にあたる51.3%の生徒が良好な回答をしている。今後、生徒の主体的・意欲的な学びを目指し、この数値を上げていけるように取り組んでいきたい。また、現在「実用英語技能検定」の受験率は44.0%であるが、生徒へのより積極的な働きかけを行うことで受験率の向上に努めていきたい。今後、1月実施の「第2回意識調査」の結果を考察し、意識調査をこれからの実践に生かしていきたい。
- CAN-DO リストと指導計画（シラバス）は作成を済ませたが、中学校との具体的な連携については検討を進めることができなかった。中高間のつながりを意識した授業実践に取り組むことが、今後の課題となる。
- 相互授業視察は、市川中学校2学年の授業を2回（11月）行った。ペア活動による「比較級」を用いて自己表現を行う授業であった。生徒が事前に作成した絵などを教材として活用していて、高校の授業づくりにも生かせる手法を学ぶことができた。大変参考になった。
- 実態についての情報交換は、担当者会議、授業参観時に行うことができた。どのような Classroom English が使われているのかや、英語に対する小中学校の意識などがわかり、有意義なものとなった。
- 12月に2回、市川中学校への出前授業を行った。2学年全クラス（3クラス）で、高校の教科書を中学生向けにアレンジしたものをペアで音読する授業を実施した。また、今年度県高校暗唱弁論大会に出場した生徒（2名）の発表を聞いたり、高校の英語学習について話を聞いたりする活動も取り入れた。授業後に行ったアンケート結果では、「高校での英語学習について詳しく知ることができましたか」という質問に対して、約85%の中学生が「はい」と回答した。また、「今後、英語を学習する上で、やる気は高まりましたか」という質問に対しても、約85%の中学生が「高まった」若しくは「少し高まった」と回答した。この企画を通じて、高校の英語学習について理解を深めるとともに、英語学習に対する意欲が高まったと感じる。
- 課題としては、意識調査が校内の結果を分析するだけでなく、校種間でどのような変化を見せているのかを検証し、小・中・高の連携に生かしていきたい。

第二年次

- 諸調査及び諸検査等の結果分析を踏まえ、作成した指導計画及びCAN-DO リストの実践、検証を行い、指導及び評価の改善を図る。
- 実践研究、実践交流を行うとともに、研修と異校種間の連携に努め、教職員の指導力向上を図る。

【全体】

- ・講師を招聘しての学習会
- ・小中、中高での児童生徒や指導内容に関する情報交換（年度末）
- ・小・中・高における相互授業視察
- ・中学校（高校）英語科教員による小学校（中学校）での出前授業
- ・ALTの効果的な活用

【小学校】

〈全体〉

- ・児童・保護者・指導者の意識調査
- ・英語教育に関する保護者への情報発信（お便り、学校開放日、授業参観など）

- ・教員対象英語研修 (Classroom English や英会話)
- ・研究開発校への視察
- ・小小における交流授業
〈3, 4 学年〉
- ・指導計画の作成と実践・検証・改善
- ・CAN-DO リスト (学習到達目標) の改善
- ・Hi, friends! (デジタル教材含む) の活用
- ・Hi, friends! の文科省の指導案を基に児童の実態に合わせた独自の指導案による授業実践と改善
- ・高学年の英語科につながる「読む・書く」を意識した教材開発
- ・「聞くこと」「話すこと」の指導法の研究と実践・検証・改善
〈5, 6 学年〉
- ・CAN-DO リスト (学習到達目標) の改善
- ・中学校の使用教科書と文科省補助教材の内容 (含取り扱う単語) の系統性を整理した指導計画の作成と実践・検証・改善 (中学校と連携)
- ・文部科学省補助教材の活用
- ・中学校との連携を意識した教材 (音と文字の関連性への気づきを促すような教材) の開発
- ・「読むこと」「書くこと」の指導法の研究と実践・検証・改善
- ・4 技能の評価方法についての研究と実践・検証・改善
- ・独自テストの改善・実施とパフォーマンステスト (Speaking) の実施
- ・モジュール授業の指導内容についての研究と指導計画の作成
- 【中学校】
- ・生徒, 保護者, 指導者の意識調査
- ・小学校教科型英語を踏まえた CAN-DO リスト (学習到達度目標) を用いた授業実践と見直し
- ・小学校教科型英語を踏まえた指導計画を基にした授業実践と改善
- ・使用教科書を用いて, 小学校で扱われた語や表現等を中学校でどの場面で扱い, スパイラルに何度も扱い直すことができるものの実践と改善
- ・高等学校の使用教科書の内容との系統性を整理した指導計画の実践, 検証, 改善
- ・小学校教科型英語を経験した生徒と外国語活動のみを経験した生徒の 4 技能それぞれの能力の比較, 分析
- ・地域に伝わる民話などの扱った教材の開発
- ・「授業は英語で行うことを基本」とし, 指導者の英語力の向上を図るため, 小中学校英語担当教員, ALT との研修
- ・独自のテストの作成と実施, パフォーマンステスト (書くこと・話すことに重点を置くもの) の実施
- ・小学校外国語活動及び教科型英語の授業観察, 高等学校の英語の授業観察
- ・小中, 中高での児童生徒の英語に関する実態についての情報交換
- ・小中間, 中高間での交換授業の実施
- ・研究開発校への視察
- 【高等学校】
- ・生徒, 指導者の意識調査
- ・英語科を核とした本事業の推進
- ・CAN-DO リスト (学習到達度目標) を用いた授業実践

- ・小・中・高での相互授業観察
- ・小・中・高での生徒の英語に関する実態について情報交換
- ・小中での出前授業の実施

第三年次

- 諸調査及び諸検査等の結果分析を踏まえ、作成した指導計画及びCAN-DO リストの実践、検証を行い、指導及び評価の改善を図る。
- 実践研究、実践交流を深めるとともに、研修と異校種間の連携に努め、教職員の指導力向上を図る。

【全体】

- ・講師を招聘しての学習会
- ・小中，中高での児童生徒や指導内容に関する情報交換（年度末）
- ・小・中・高における相互授業視察
- ・中学校（高校）英語科教員による小学校（中学校）での出前授業
- ・ALT の効果的な活用

【小学校】

〈全体〉

- ・児童・保護者・指導者の意識調査
- ・英語教育に関する保護者への情報発信（お便り，学校開放日，授業参観など）
- ・教員対象英語研修（Classroom English や英会話）
- ・小小における交流授業（各学期2回程度）

〈3, 4 学年〉

- ・指導計画の作成と実践・検証・改善
- ・CAN-DO リスト（学習到達目標）の改善
- ・Hi, friends!（デジタル教材含む）の活用
- ・Hi, friends! の文科省の指導案を基に児童の実態に合わせた独自の指導案による授業実践と改善
- ・高学年の英語科につながる「読む・書く」を意識した教材の活用と改善
- ・「聞くこと」「話すこと」の指導法の研究と実践・検証・改善

〈5, 6 学年〉

- ・CAN-DO リスト（学習到達目標）の改善
- ・中学校の使用教科書と文科省補助教材の内容（含取り扱う単語）の系統性を整理した指導計画の作成と実践・検証・改善（中学校と連携）
- ・文部科学省補助教材の活用
- ・中学校との連携を意識した教材（音と文字の関連性への気づきを促すような教材）の活用と改善
- ・「読むこと」「書くこと」の指導法の研究と実践・検証・改善
- ・4 技能の評価方法についての研究と実践・検証・改善
- ・独自テストの改善・実施とパフォーマンステスト（Speaking）の実施
- ・モジュール授業の実施と改善

【中学校】

- ・生徒，保護者，指導者の意識調査
- ・小学校教科型英語を踏まえた CAN-DO リスト（学習到達度目標）を用いた授業実践と見直し
- ・小学校教科型英語を踏まえた指導計画を基にした授業実践と改善

- ・使用教科書を用いて、小学校で扱われた語や表現等を中学校でどの場面で扱い、スパイラルに何度も扱い直すことができるものの実践と改善
 - ・高等学校の使用教科書の内容との系統性を整理した指導計画の実践、検証、改善
 - ・小学校教科型英語を経験した生徒と外国語活動のみを経験した生徒の4技能それぞれの能力の比較、分析
 - ・地域に伝わる民話などの扱った教材の開発
- 「授業は英語で行うことを基本」とし、指導者の英語力の向上を図るため、小中学校英語担当教員、ALTとの研修
- ・独自のテストの作成と実施とパフォーマンステスト（書くこと・話すことに重点を置くもの）の実施
 - ・小学校外国語活動及び英語の授業観察、高等学校の英語の授業観察
 - ・小中、中高での児童生徒の英語に関する実態についての情報交換
 - ・小中間、中高間での交換授業の実施
- 【高等学校】**
- ・生徒、指導者の意識調査
 - ・英語科を核とした本事業の推進
 - ・CAN・DO リスト（学習到達度目標）を用いた授業実践と見直し
 - ・小・中・高での相互授業観察
 - ・小・中・高での生徒の英語に関する実態について情報交換
 - ・小中での出前授業の実施と見直し

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次

【小学校】

- ・アンケートの結果から変容を見取る。（3～6年生，9月・1月の2回）
- ・CAN・DO リストに沿ってパフォーマンステスト・独自テストを実施（3～6年生）
- ・目的に合った教材の開発
- ・小小の交流授業の実施

＜平成27年度の進捗状況・課題＞

- 年度初めにアンケート調査を行う予定であったが、拠点校全体で共通のアンケート内容を検討・作成し、実施につなげたため、予定より遅い実施になってしまった。第2回は1月中に行い、変容を見取る予定である。結果を次年度の計画に生かしていきたい。
- 独自テストについては、6年生についてアルファベット指導を開始する前にアルファベットを書くテストを実施した。Speaking テストについては、3月に実施する予定である。3～5年生については、内容の検討が十分に進まず、前期の実施を見送った。今後は、児童の発達段階や実態を考慮しつつ、外国語活動のねらいを踏まえ、内容を検討していきたい。
- 外国語活動型、教科型それぞれにおいて、児童の実態に合わせた教材開発を行ってきた。例えば「読むこと」「書くこと」との関連教材では、「文字」と「絵」の両者を発達段階にあわせて配置バランスを変えながら提示することが効果的であることなどがわかってきた。文字を入れて絵を提示する際「教科型」では絵を小さくして文字を大きくしたり、文もカードにして提示したりすることで、児童の意識が

自然と文字に向いていく様子が見えてきた。今後も継続して研究を進め、教材開発・改善をしていく。
○今年度は、2回の交流授業を実施した。2つの小学校の児童が同じ中学校へ進学するため、更に定期的な交流授業を実施したい。

【中学校】

- ・アンケート結果から変容を見取る。(9月・1月の2回)
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(学期に1回)
- ・独自テストの実施
- ・外部試験の実施(年度はじめ)

＜平成27年度の進捗状況・課題＞

- 研究のスタートとして初年度に生徒、保護者、指導者の意識調査を実施し、経年でその推移を分析し、授業改善に生かしていくことが研究開発を担うこの事業の基本として捉えた。生徒の実態は今年度の9月の状況では、英語に対する苦手意識が学年が上がるにつれて数値が上がる傾向にあるが、この結果をどのように実際の授業改善につなげるかが課題である。1月に同様の調査を実施し、分析していく。
- CAN-DO リストに沿ったパフォーマンステストを各学年とも1, 2学期に2回実施し、3学期に1回計画している。主にリーディングテスト、レシテーション(暗唱)テスト、Speaking(インタビュー)テストを実施した。
- 独自のテストの作成と実施については、各学年の定期テスト計5回は指導計画と指導内容に沿って実施し、すべて独自に作成したものである。定期テストには書くことについてのテストも含まれている。また、各学年とも外部の標準テストも年間3回以上実施し客観的な到達度の把握に努めている。
- 今年度は年度の終わりにCRTを1, 2年生で実施し、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの学習状況を経年で比較していくこととした。今年度は特別に2年生でGTECを12月に実施した。いずれも結果の分析と検証は3学期に行う予定である。

【高等学校】

- ・アンケート結果から変容を見取る。
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(年1回)
- ・外部試験受験の推奨

＜平成27年度の進捗状況・課題＞

- 9月と1月の2回、1学年生徒全員を対象に意識調査アンケートを実施する予定である。既に第1回は実施されているが、今後、第2回との比較で意識にどのような変容が見られたかを検証していきたい。
- パフォーマンステストについては、2学年で2回実施した。普通科については、「世界に発信したい日本のポップカルチャー」というタイトルで発表を行った。授業で学んだ表現を発表で活用することにより、その力をより確かなものにすることができた。英語科については、教科書で読んだ「国境なき医師団」についての内容に関して、インタビュー形式で英語による発表を行った。本文を要約する力や、それを基にした発表力の育成につなげることができた。
- 英語検定の受験者については、例年と比べて増加した。(優遇措置が取られ、検定料が減額されたことが原因の一つであると考えられる。)また、来年度については英語科(1, 2年生)にGTECを年2回導入する予定である。

第二年次**【小学校】**

- ・アンケートの結果から変容を見取る。(3～6年生, 年度初め・終わりの2回)
- ・CAN-DO リストに沿ってパフォーマンステスト・独自テストを実施(3～6年生, 前期・後期の2回)
- ・小小の交流授業の実施

【中学校】

- ・アンケート結果から変容を見取る。(年度はじめと終わりの2回)
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(学期に1回)
- ・独自テストの実施
- ・外部試験の実施(年度はじめ)

【高等学校】

- ・アンケート結果から変容を見取る。
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(前期, 後期各1回ずつ)
- ・外部試験受験の推奨

第三年次**【小学校】**

- ・アンケートの結果から変容を見取る。(3～6年生, 年度初め・終わりの2回)
- ・CAN-DO リストに沿ってパフォーマンステスト・独自テストを実施(3～6年生, 前期・後期の2回)
- ・目的に合った教材の開発
- ・小小の交流授業の実施

【中学校】

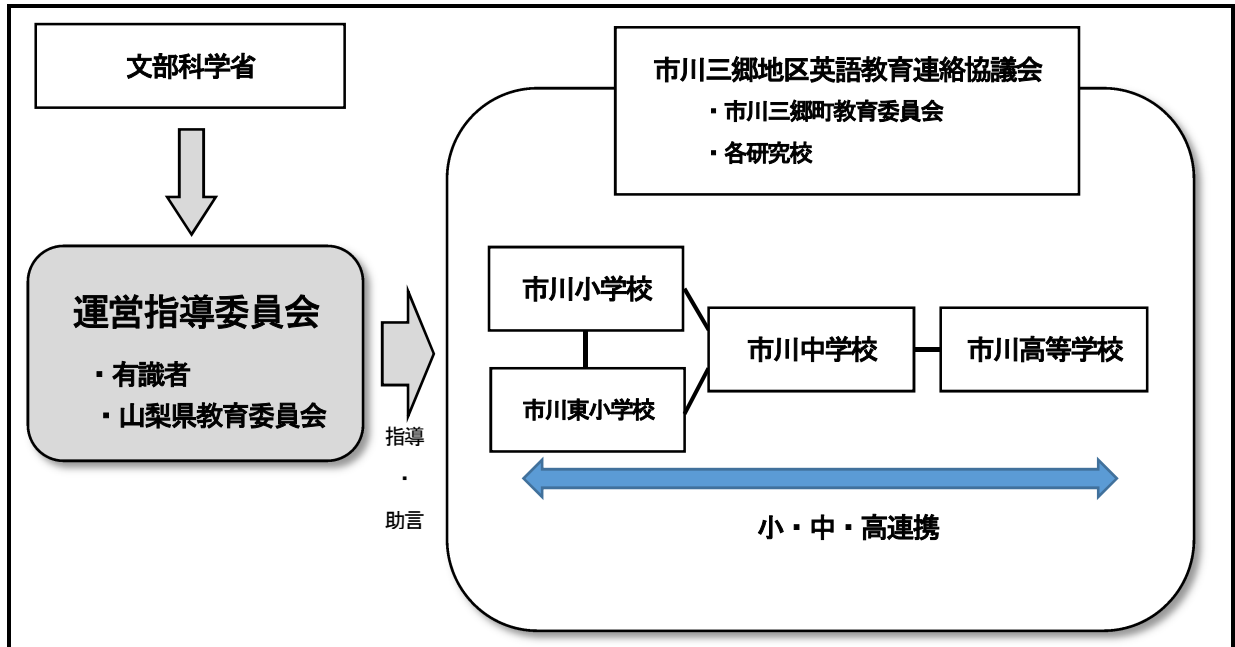
- ・アンケート結果から変容を見取る。(年度はじめと終わりの2回)
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(学期に1回)
- ・独自テストの実施
- ・外部試験の実施(年度はじめ)

【高等学校】

- ・アンケート結果から変容を見取る。
- ・CAN-DO リストに基づいたパフォーマンステスト(年1回)
- ・外部試験受験の推奨

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(4月30日木曜日)

・平成27年度の取組内容、計画についての説明会開催

○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(10月15日木曜日 「山梨県英語フォーラム」)

・第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、ポスターセッション形式で研究校が研究計画を発表する。運営指導委員会が研究校の発表内容について指導・助言を行う。

○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催

(2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」)

・各強化地域拠点が、1年間の取組の成果と課題を報告する。運営指導委員会は、報告を踏まえ、次年度に向けて指導・助言を行う。

<平成27年度の進捗状況>

○第1回山梨県英語教育強化推進委員会では、県下の指定5地域の担当者が一堂に会し、本事業の趣旨や研究の進め方等について共通理解を図った。また、運営指導委員の山梨大学教育人間科学部教授による「小・中学校、高等学校を含めた外国語教育の現状と課題」と題した基調講演を聴き、小・中・

高の連携の意義を確認した。これを受けて本町では、5月に第1回英語教育強化地域拠点小・中・高連絡協議会を開催し、小・中・高の連携についての具体的協議をスタートした。

- 第2回山梨県英語教育強化推進委員会（山梨県英語フォーラム）では、今年度の研究計画をポスターセッション形式で発表し、県内の多くの先生方へ取組を伝えることができた。本町では「グローバル化する社会に対応できる人材の育成を目指して」～小中高の幅広い連携を通して～をテーマに、「授業づくり」と「つながる」という2つのキーワードを示して説明をした。本町の特色的な取組として、「交流活動」「情報交換」「教室英語」「意識調査」「相互授業参観」といった小・中・高の連携を深めていくための手立てについて紹介をした。ポスターにまとめることを通して、研究の方向性を再確認するとともに、具体的活動への見通しをつけることもできた。
- ポスターセッションや全体会で、他地域の取組の様子を知ることができたことは、とても有意義であった。本町の取組に足りない視点や取組の遅れている点などを自覚することができ、その後の活動に生かすことができた。また、文部科学省教科調査官直山木綿子先生の講演を聴くことで、これからの英語教育の方向性について最新の情報を得ることができた。研究を進めていく上で大きな示唆をいただき、大変有意義なものとなった。
- 第3回山梨県英語教育強化推進委員会は今後2月に行われ、今年度の成果や来年度に向けた課題を発表する予定である。第2回山梨県英語教育強化推進委員会（山梨県英語フォーラム）で発表した計画をどのように実践に移し、どのような成果や課題が見つかったのかを明確にして発表していきたい。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> ○各校研究体制の整備 ○小学校教員英語研修（市川小・週1回・通年） 	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回山梨県英語教育強化推進委員会の開催（4月30日木曜日） ・平成27年度の取組内容、事業計画について、運営指導委員会からの説明を受けて、研究計画の充実を図る。
5月	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回英語教育強化地域拠点小・中・高連絡協議会 ○市川中学校の生活参観（小学校からの英語の授業参観） 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ○講師を招聘しての学習会（市川小学校全職員・小中高各校担当者・町教委担当者・指導主事が参加） ○英語教諭打合せ会議（各校担当者） ○英語検定の実施①（中学校希望者） 	
7月	<ul style="list-style-type: none"> ○市川高校オープンスクール（中学からの英語授業参観） ○市川東小学校開放日（保護者参加型授業） 	

8月	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回英語教育強化地域拠点小・中・高連絡協議会 ○講師を招聘しての学習会 ○姉妹都市マスカティーンとの交流事業（中学生参加） 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○第1回意識調査の実施・集計（小・中・高） ○市川高校研究授業 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○中学校全学年英語パフォーマンステスト （英語暗唱大会代表者出場） ○中学校授業参観（小学校から授業参観・ビデオ撮り） ○中学校英語暗唱大会 ○「山梨県英語フォーラム」の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・研究計画等をポスターセッション形式で発表。 ○第1回地区英語担当者会議 <ul style="list-style-type: none"> ・各校研究の進捗状況の共有，小・中・高の連携や出張授業についての話し合いなど。 ○市川高校授業公開 ○英語検定の実施②（中学校希望者） ○市川小学校学校開放日 	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回山梨県英語教育強化推進委員会の開催 （10月15日木曜日「山梨県英語フォーラム」） ・第1回運営指導委員会での指導・説明をどのような形で取組に反映させているかを明らかにし，ポスターセッション形式で研究計画等を発表。 ・研究校は，運営指導委員会から指導・助言を受けた。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ○研究開発校視察（秋田県由利本荘市 由利小学校） ○中学校生活参観週間（小学校・高等学校から参加） ○中学生の英語暗唱発表（市川小学校にて） ○第1回地区英語教育推進会議 <ul style="list-style-type: none"> ・指定校以外の学校への研究内容の伝達 ○市川小学校研究授業（活動型・教科型） （町内小中学校教員の参加） ○第2回地区英語担当者会議 <ul style="list-style-type: none"> ・意識調査の結果について，先進校視察の還流報告等 ○市川中学校研究授業（小学校，高等学校担当者の参加） 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ○英語教育強化地域拠点事業 英語教育学習会（市川小） <ul style="list-style-type: none"> ・町内の各小・中・高校より担当者等が参加 ○中学校教員の小学校への出前授業 （小学校6年生対象，小・小連携） ○市川高校教員の中学校への出前授業（高校生も参加） ○第3回地区英語担当者会議 <ul style="list-style-type: none"> ・各校研究の進捗状況の共有，小中高連携事業の実施状況の情報交換，研究成果と課題の考察等 	

1月	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回意識調査の実施・集計（小・中・高） ○第4回地区英語担当者会議 <ul style="list-style-type: none"> ・各校の研究成果の確認、第2回意識調査の考察等 ○中学1・2年生を対象としたCRTの実施 ○第3回英語教育強化地域拠点小・中・高連絡協議会 ○小・中学生の交流会 ○英語検定の実施③（中学校希望者） 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ○「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」の開催 <ul style="list-style-type: none"> ・強化地域ごとに取組成果を発表。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。 ○第5回地区英語担当者会議 	<ul style="list-style-type: none"> ○第3回山梨県英語教育強化推進委員会の開催 （2月9日火曜日 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」） <ul style="list-style-type: none"> ・研究校は、1年間の取組の成果と課題を報告する。
3月	<ul style="list-style-type: none"> ○市川高校英語科ワークショップ ○第6回地区英語担当者会議 	
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ○市川高校音楽部による小学校訪問（交流活動、英語ミュージカル上演、小・小連携）7月 ○市川高校音楽部による中学校訪問（交流活動、英語の歌の発表）11月 		

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名	山梨県教育委員会
所在地	山梨県甲府市丸の内一丁目6番1号
代表者職氏名	教育長 阿部 邦彦

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	やまなしけんりつふえふきこうとうがっこう	ふりがな	かがみ しろう
学校名	山梨県立笛吹高等学校	校長名	加賀美 史朗
ふりがな	ふえふきしりつかすがいちゅうがっこう	ふりがな	ふるや かずひこ
学校名	笛吹市立春日居中学校	校長名	古屋 一彦
ふりがな	ふえふきしりつかすがいしょうがっこう	ふりがな	いいだ まさふみ
学校名	笛吹市立春日居小学校	校長名	飯田 政文

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

英語によるコミュニケーション能力を育成するため、小・中・高を通じた一貫性のある教育課程の編成及び指導と評価の改善による効果的な授業の研究開発に取り組む。

(2) 研究の概要

国際社会に生きる日本人として、英語における4技能(「話す」「聞く」「読む」「書く」)をバランスよく身に付け、他者と積極的にコミュニケーションを図りながら新しい価値を創造していく人材育成を目指し、グローバル化に対応した英語教育の在り方について研究を行う。

小学校第3学年、第4学年では、“Hi, friends!”を活用し、高学年の英語科への円滑な接続に向けた教育課程の開発及び指導と評価の方法について、「CAN-DO リスト」の作成と活用をとおして研究を進める。

小学校第5学年、第6学年では、文部科学省作成の補助教材を活用し、読む・書く活動の効果的な指導と評価の方法を中心に、外国語活動及び中学校英語科との円滑な接続に向けた教育課程を「CAN-DO リスト」の作成と活用を通して開発する。

中学校、高等学校においては、小学校での学習を生かしながら英語で授業を行う授業スタイルを確立していく。また、小・中・高と系統的な指導が効果的に行えるよう、生徒の発達段階や学校・地域の実情に応じた教育課程を「CAN-DO リスト」の作成と活用を通して開発する。具体的には、中学校では積極的に英語でコミュニケーションを図る意欲や態度を育むとともに、身近な話題について英語を運用しながら効果的に4技能を高めることに重点を置いて研究を行う。高等学校では、中学校の英語教育をさらに発展させ、英語による発表や討論など言語活動の高度化を目指した研究に取り組む。

なお、教育課程の開発、指導と評価の方法、「CAN-DO リスト」の作成にあたっては、小学校教員、

中学校教員，高等学校教員が児童生徒の実態や研究課題等を共有する中で研究を進め，検証結果の実証について多角的に分析しながらの信頼性や妥当性を高めていく。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

本市は，桃やぶどうの出荷量が全国一で，歴史的・文化的資源が多い。また，石和町と春日居町は，全国屈指の温泉郷であることから，国内外を問わず毎年多くの観光客が本市を訪れている。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え，今後も海外からの多くの観光客が見込まれている。

市内には小学校14校，中学校5校，県立高等学校1校，県立特別支援高等学校（平成27年度開校）が1校あり，教員相互の授業参観や児童生徒による交流活動など，小・中・高の連携した取組を積極的に行っている。

本市では，中学校区を単位に計6名のALTを配置し，小学校の外国語活動や中学校の英語科の指導助手を担当させ，学力の定着を図っている。小学校第5・6学年では“Hi, friends!”や視覚教材等を活用し，週1時間英語の基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を育てている。中学校では，市内の英語教育研究会が作成したワークシートを活用して基礎基本の定着を図り，学校の実情に応じて少人数指導を実施するなど，きめ細かな指導を展開している。小中学校の共通課題は，児童生徒の実態に応じた学習内容の充実，学習意欲及びコミュニケーション能力のさらなる向上である。

今後の小学校における英語教育の実施に向け，「CAN-DO リスト」の作成による目標設定と指導内容の改善を進めながら英語教育の在り方について研究を進めていく。そして小・中・高一貫した系統的な教育課程と指導及び評価方法を開発し，グローバル化に対応した人材育成を図っていききたい。

②研究仮説

<小学校外国語活動（第3学年，第4学年）>

身近な英語に興味をもたせ，英語の音声や表現に慣れ親しませることによって，コミュニケーション能力の素地を養う。

<小学校英語科（第5学年，第6学年）>

外国語活動との円滑な接続を図り，子供の実態に応じて読む・書く活動を適切に取り入れることによって，4技能（「話す」「聞く」「読む」「書く」）の基礎的なコミュニケーション能力を養う。

<中学校英語科>

小学校英語科との円滑な接続を図るとともに基本的に英語で授業を行い，身近な話題について英語を運用することによって4技能を高め，実践的なコミュニケーション能力を養う。

<高等学校英語科>

小・中の系統的な指導を基に，英語による言語活動の高度化を図ることによって，的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

③研究成果の評価方法

<共通>

- ・質問紙による意識調査の実施（年2回 対象：児童，生徒，保護者，教員）

<小学生>

- ・児童の見取り，自己評価カード，相互評価カード，成果物による分析

<中学生，高校生>

- ・パフォーマンス評価，定期テストによる分析

<教員>

- ・質問紙や聞き取りによる研究に関する意識調査

(4) 研究開発型 ※平成27年度新規採択件については、平成26年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 学年 コマ	第3, 4, 5学年 1コマ	第3, 4学年 1コマ	第3, 4学年 1コマ
②小学校 教科型	第 学年 コマ	第6学年 1コマ	第5, 6学年 1, 1.5コマ	第5, 6学年 2コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

<p>第一年次 平成27年度(1年目) 小 学 校</p> <p>1. 外国語活動型・・・第3学年, 第4学年, 第5学年</p> <p>○コミュニケーション能力の素地を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させる。 ・身近なものを英語で表現させる。 <p><実践内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Hi, friends! 1 (第3学年, 第4学年)」「Hi, friends! 1及びHi, friends! 2 (第5学年)」を活用した授業 ・英語科への円滑な接続に向けた外国語活動の年間指導計画の作成 ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成 ・小学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法, 評価方法の開発 ・授業におけるICTの活用 ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観 <p>2. 教科型・・・第6学年</p> <p>○初歩的な英語の運用能力を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「話す」「聞く」ことによるコミュニケーションの楽しさを味わわせるとともに、「読む」「書く」ことに親しませる。 <p><実践内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省の補助教材を活用した授業 ・中学校の英語科への円滑な接続に向けた第6学年の年間指導計画の作成 ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成 ・中学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法, 評価方法の開発 ・授業におけるICTの活用 ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観 <p>中 学 校</p> <p>○コミュニケーションを図ることができる能力を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な話題についての理解や簡単な情報交換, 表現を楽しむ。 ・英語で授業を行うことを基本とする。 <p><実践内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校で使用している教科書で授業 ・小学校及び高等学校との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の作成 ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成 ・小中の接続を踏まえた教材・教具や指導法, 評価方法の開発
--

- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

高等学校

○英語を通じて情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる。
- ・様々な方法で表現する。(スピーチ, ロールプレイ等)
- ・授業を英語で行う。

<実践内容>

- ・高等学校で使用している教科書で授業
- ・小・中との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の作成
- ・小中高一貫した「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成
- ・言語活動の高度化に向けた教材・教具や指導法, 評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

第二年次

平成28年度(2年目)

小学校

1. 外国語活動型・・・第3学年, 第4学年

○コミュニケーション能力の素地を養う。

- ・英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させる。
- ・身近なものを英語で表現させる。

<実践内容>

- ・「Hi, friends! 1 (第3学年)」「Hi, friends! 2 (第4学年)」を活用した授業
- ・英語科への円滑な接続に向けた外国語活動の年間指導計画の活用と改善
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・小学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法, 評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

2. 教科型・・・第5学年, 第6学年

○初歩的な英語の運用能力を養う。

- ・「話す」「聞く」ことによるコミュニケーションの楽しさを味わわせるとともに、「読む」「書く」ことに親しませる。
- ・定型表現を活用し, 英語によるコミュニケーションを楽しませる。

<実践内容>

- ・文部科学省の補助教材を活用した授業
- ・第6学年に接続する第5学年の年間指導計画の作成
- ・第5学年の「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成
- ・中学校英語科への円滑な接続に向けた第6学年の年間指導計画の活用と改善
- ・第6学年の「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・中学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法, 評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

中 学 校

- コミュニケーションを図ることができる能力を養う。
 - ・身近な話題についての理解や簡単な情報交換，表現を楽しむ。
 - ・授業における英語使用量を増やす。

<実践内容>

- ・中学校で使用している教科書で授業
- ・小学校及び高等学校との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の活用と改善
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・4領域を統合した教材・教具の開発
- ・高等学校への円滑な接続に向けた指導法や評価方法の改善
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

高 等 学 校

- 英語を通じて情報や考えなどを的確に理解したり，適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。
 - ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる。
 - ・話者とある程度流暢にやりとりができる。
 - ・様々な方法で表現する。（スピーチ，ロールプレイ等）
 - ・授業を英語で行う。

<実践内容>

- ・高等学校で使用している教科書で授業
- ・小・中との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の活用と改善
- ・小中高一貫した「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・言語活動の高度化に向けた教材・教具や指導法，評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

第三年次

平成29年度（3年目）

小 学 校

1. 外国語活動・・・第3学年，第4学年

- コミュニケーション能力の素地を養う。
 - ・英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させる。
 - ・身近なものを英語で表現させる。

<実践内容>

- ・「Hi, friends! 1（第3学年）」「Hi, friends! 2（第4学年）」を活用した授業の充実
- ・英語科への円滑な接続に向けた外国語活動の年間指導計画の活用と改善
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・小学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法，評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

2. 教科型・・・第5学年，第6学年

- 初歩的な英語の運用能力を養う。
 - ・「話す」「聞く」ことによるコミュニケーションの楽しさを味わわせるとともに、「読む」「書く」ことに親しませる。
 - ・英語を使って，考えや気持ちを伝える大切さを実感させる。

- ・定型表現を活用し、英語によるコミュニケーションを楽しませる。

<実践内容>

- ・文部科学省の補助教材を活用した授業の充実
- ・中学校英語科への円滑な接続に向けた年間指導計画の活用と改善
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・中学校英語科への接続を踏まえた教材・教具や指導法、評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

中 学 校

○コミュニケーションを図ることができる能力を養う。

- ・身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現を楽しむ。
- ・授業における英語使用量を増やす。

<実践内容>

- ・中学校で使用している教科書で授業
- ・小学校及び高等学校との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の活用と改善
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・4領域を統合した教材・教具の開発
- ・高等学校への円滑な接続に向けた指導法や評価方法の改善
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

高 等 学 校

○英語を通じて情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できる。
- ・話者とある程度流暢にやりとりができる。
- ・言語活動を高度化（発表、討論等）。
- ・授業を英語で行う。

<実践内容>

- ・高等学校で使用している教科書で授業
- ・小・中との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の活用と改善
- ・小中高一貫した「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の活用と改善
- ・言語活動の高度化に向けた教材・教具や指導法、評価方法の開発
- ・授業におけるICTの活用
- ・小・中・高の教員による授業交流及び授業参観

○平成27年度の進捗状況・課題

小 学 校

1. 外国語活動型・・・第3学年、第4学年、第5学年

「Hi, friends! 1」の中から簡単な文型を基本に、電子黒板用ソフトを活用し、児童の実態・関心に合わせて学習を進めている。

3, 4年生は初めての内容なので抵抗感をもつ児童もいるが、単元の導入段階でチャンツやゲーム、会話練習を繰り返し練習する場を設けることで、楽しみながら学習をしている。チャンツやゲームを取り入れた学習内容は、児童の英語に対する意欲や関心を高めることができる。しかし、ゲーム性が強くなり過ぎると、英語に親しむというよりもゲームの結果にこだわってしまい、学習効果が下がってしまう児童もいる。児童が飽きずに繰り返し取り組める内容を工夫していきたい。

5年生は、「Hi, friends! 1」や「Hi, friends! 1」の電子黒板用ソフトを使用し、文科省の示した流れに沿って学習を進めている。T1, T2, ALTによるきめ細かな指導に努め、英語での会話練習を充実させている。教科書の挿絵と同じサイズの名刺サイズの絵カードに、アルファベットを表記したものを作成し、「書く・読む」の練習を機能的にできるよう工夫している。電子黒板用ソフトを用いることで、「見て聞いて、話して確かめる」という一連の活動が有効に行える。「once more」と児童が何度も繰り返して英語を聞き取りたいという要求にも応えられる点で効果的である。

2. 教科型・・・第6学年

6学年は、「Hi, friends! 2」を用い、さらに、「Hi, friends! Plus」を加えて学習内容を組み立てた。基本的には、「Hi, friends! 2」の年間計画に基づいて学習を進めているが、1時間の授業での「聞く・話す、読む・書く」の4技能の活動をパターン化することで習熟を図るようにした。授業の始めには、ワークシートを活用しながら聞いて読む「アブクド読み」を行い、アルファベットの大文字と小文字については、毎時間3分程度慣れ親しませた。

「Hi, friends! Plus」の補助教材を活用することで、発音練習に積極的に取り組めるようになった。ワークシートを活用しながらアブクド読みを毎時間行うことで、デジタル教材やALTの発音を聞き取れる児童が増えてきた。ネイティブな発音に慣れることで、聞き取ろうとする意欲が以前より増してきた。電子黒板用ソフトは、外国語活動と同様、「見て聞いて、話して確かめる」に有効で、児童の繰り返し英語を聞き取りたいという要求にも応えられる。

1時間の授業にできるだけ4技能を取り入れるよう努めたことで、活動への参加のみではなく、目的をもって学習する意識が児童に生まれてきた。本時の基本となる表現を身につけようと、友達と会話練習を行う姿も見られた。また、「書く」活動を取り入れたことで、アルファベット練習だけにとどまらず、その時間の基本文型や会話練習・チャンツ等を4線に記録するようになった。「書く」ことは記憶する手助けになり、学習の積み重ねに有効であった。

小中の連携を図るため、7月には春日居小学校6年生が春日居中学校を訪問し、英語の授業を体験した。曲に合わせてアルファベット26文字の音を学び、「Hi, friends! Plus」につながる内容であったことから、小中の円滑な接続を意識した授業の在り方を考えるきっかけとなった。

中 学 校

授業の導入時に本時の目標を黒板に示すことで、学習到達目標を設定した。授業は英語で行うことを基本とし、教師が英語で日時や天気などを質問して生徒同士で英語を話す場面を設定するなど、言語使用場面を工夫した。身近な話題を題材として日常的にコミュニケーションを図ることで、英語で表現することを楽しむ姿が見られた。

また、山梨県版「CAN-DOリスト」を意識した授業づくりを行うとともに、スピーキングやリーディングといったパフォーマンステストを一人一人に実施しながら評価へとつなげ、授業改善を行った。ペアや小グループを活用した実践により、生徒が英語で表現することへの抵抗感は少なくなっている。

本年度、小学校・高校の教員との授業交流を実施し、異校種間の接続を意識した授業改善や連携していく上での課題点や問題点を共通理解できた。特に、小学校と中学校の学習内容や授業のスピードの違いなどから、中学1年時の指導法や教材を小学校と共有したり、小学校で習得しておくべき技能を明らかにしたりすることの重要性が確認された。

来年度は、本年度と同様に学習到達目標を設定し、「CAN-DOリスト」が反映された学習内容を引き続き検討しながら、年間を通して検証していきたい。また、小学校・高校の教員との連携を図り、生徒のつまずきや問題点を多角的に把握するとともに、異校種間の接続を踏まえた教材・教具の開発をさらに進めていきたい。

高 等 学 校

今年度においては、ALTとTTで受け持つ科目を中心に、コミュニケーションやスピーチ、ロールプレイなどの活動を取り入れた。これらの活動においては、生徒は主体的に活動し、英語によるコミュ

ニケーションを意欲的に図ろうとする姿も見られた。しかし、学科間の学習到達度の差や、時間数の違いなどにより、全学科において継続的にかつ効果的に活動を取り入れることは難しかった。

来年度は、より計画的に、通年で効果的な活動が設定できるように工夫していきたい。また、今年度は小学校の英語活動をメインに研究させてもらい、小学校英語活動がどのように行われているのか、そこから中高への連携を見据えていくという期間であったために、小中との円滑な接続を踏まえた年間指導計画の作成や、「CAN-DOリスト」の作成は、最終段階には至っていない。今年度進めてきた研究を生かしながら英語科教員で検討し、改善していきたい。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第一年次

平成27年度（1年目）

小学校

- ・児童、保護者、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価
- ・児童の自己評価カード、相互評価カード、成果物による分析

中学校

- ・生徒、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価
- ・パフォーマンス評価、定期テストによる評価

高等学校

- ・生徒、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価
- ・パフォーマンス評価、定期テストによる評価

第二年次

平成28年度（1年目）

小学校

- ・児童、保護者、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価
- ・児童の自己評価カード、相互評価カード、成果物による分析

中学校

- ・生徒、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価
- ・パフォーマンス評価、定期テストによる評価

高等学校

- ・生徒、教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程、授業評価、指導法、児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DOリスト」形式の学習到達目標による評価

- ・パフォーマンス評価, 定期テストによる評価

第三年次

平成29年度（3年目）

小学校

- ・児童, 保護者, 教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程, 授業評価, 指導法, 児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標による評価
- ・児童の自己評価カード, 相互評価カード, 成果物による分析

中学校

- ・生徒, 教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程, 授業評価, 指導法, 児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標による評価
- ・パフォーマンス評価, 定期テストによる評価

高等学校

- ・生徒, 教員の質問紙による意識調査
- ・研究授業における協議（教育課程, 授業評価, 指導法, 児童生徒の変容等）
- ・「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標による評価
- ・パフォーマンス評価, 定期テストによる評価

○平成27年度の進捗状況・課題

小学校

児童の意識調査を行うことで、英語に対する児童の意識を把握し、実態に応じて学習計画を立てた。意識調査では、児童が意欲的に学習に取り組んでいる結果が出ていた。高学年になっても、意欲的に取り組んでいる児童がほとんどであるが、内容を十分理解できない児童は、その困難さが意欲を減退させている傾向がある。1時間では理解できなかった内容を次時で理解できるように「ナイスコメントカード」を活用して、児童の意欲につながる指導に努めている。

授業研究会には、中学校、高校の英語担当の教員に参加してもらい、小学生の実態にあった学習内容、適切な評価などについて討議を深めることができた。中学校や高校の教員による発言が、小学校教員にはない視点からの助言が多く、授業を展開する上で大変参考になった。小学校は、基本的には英語に慣れることから始まるので、意欲的に取り組める学習環境をこれからも整えていくことが重要である。本年度は、担任、英語教育強化拠点事業のコーディネーター、ALT、JET という複数の指導者がいるので、個々の児童と指導者で会話練習をする時間がもてた。授業内容を確実に理解できたか評価しながら、学習意欲を高めることができた。

児童の自己評価カード「ナイスコメントカード」を毎時間の振り返りに活用している。項目は、外国語活動と英語では異なり、3～5学年は、外国語に親しめることに重点を置いた内容で、6学年は「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能、「CAN-DO リスト」を踏まえた内容になっている。毎時間「ナイスコメントカード」による振り返りを行うことで、児童は積極的に英語に関わろうとする意識が高まり、振り返りの観点に沿って学習する児童が増えている。また、「日本語と外国語の違いについて知ろう」の観点から、語順や発音の違いについても意識できるようになっている。

中学校

生徒の意識調査の結果から、「英語の授業を大切に思っている」生徒が9割もいる反面、「英語が好き」と答えた生徒が6割にとどまっていることが明らかになった。また、苦手意識を感じながらも、「将来英語を使えるようになりたい」と思っている生徒が9割を超えている。さらに、「小学校での外国語活動の学習が中学校でも役立っている」と感じている生徒が7割にも及んでいる。このことから小中の

連携は重要であり、英語科として春日居小学校で実施している学習内容や指導法などを意識しながら授業を行った。来年度は、英語科を経験した春日居小学校の6年生が入学してくる。春日居小学校の成果を生かしながら、1学年の英語の授業を展開したい。

オールイングリッシュの授業については、7割の生徒が少し不安を感じていた。中学校では、少しずつクラスルームイングリッシュに慣れさせながら、小学校のときよりも英語での指示に反応できるような学力をつけさせたい。

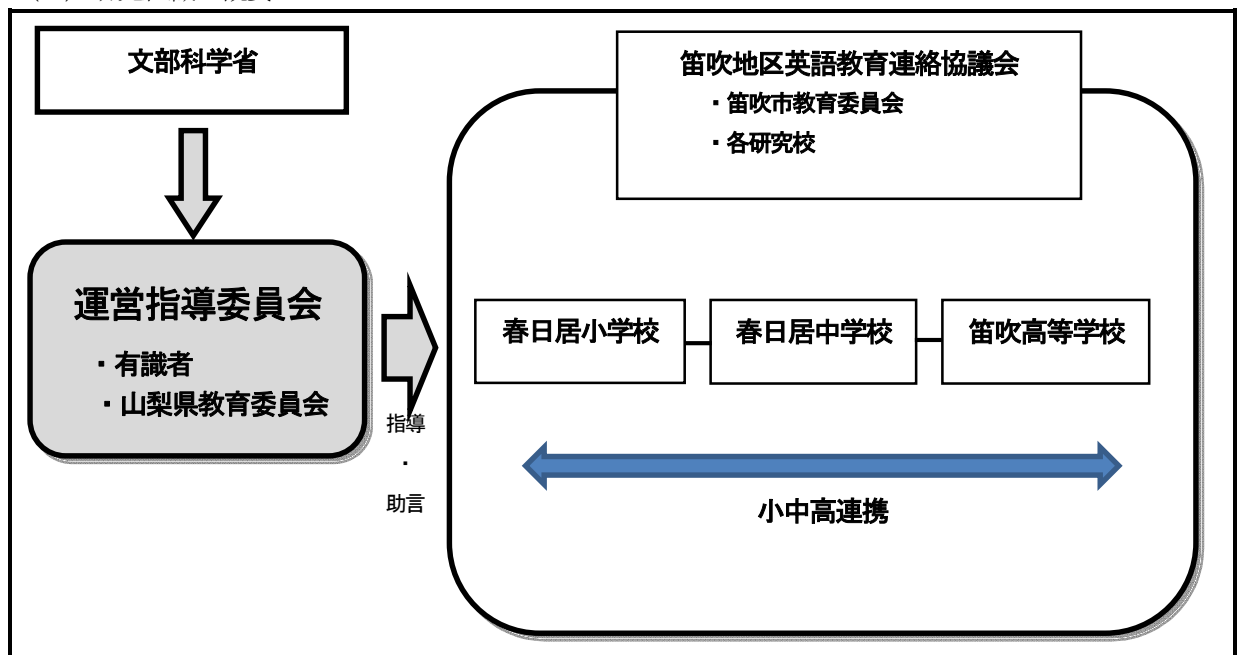
スピーキングやリーディングなどのパフォーマンス評価も、時間的な問題が解決できれば個人の学力を高める効果がある。今後、「山梨県版CAN・DOリスト」を基に、生徒の学力の変容を把握しながら研究を進めていきたい。

高等学校

パフォーマンス評価においては、ALTと協力し、インタビュー形式、毎週のライティングレポート、暗唱などを行った。本校の外国語担当教員だけでそれらを行うことが少なかったため、今後それらを多く担い、日常的なコミュニケーションの場を設定することで、生徒が英語を使用する場面を増やしていきたい。生徒は、「英語を使えるようになりたい、英語は大切である」という意識を持ってはいるが、「英語が苦手、英語がわからない」という気持ちが強い。県が作成した「CAN・DOリスト」と、今年度行ってきた小中学校の授業参観や研究討議を鑑みて、再度笛吹高校独自の「CAN・DOリスト」を今年度中に作成し、小中からの連携を意識したものにした。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

- 第1回運営指導委員会の開催
 ・各強化地域拠点が、平成27年度の取組内容、計画について説明。運営指導委員はその説明に対して指導・助言を行う。
- 第2回運営指導委員会の開催
 ・各強化地域拠点が、取組の中間報告を行う。第1回運営指導委員会での指導・助言をどのような形で取組に反映させているか、明らかにし、報告する。運営指導委員はその報告に対して指導・助言を行う。
- 「山梨県英語フォーラム」での指導・助言
 ・ポスターセッションの形式で研究校が取組を発表する。運営指導委員は研究校の発表内容について、指導・助言を行う。
- 「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」での指導・助言
 ・強化地域拠点ごとに取組成果を発表する。運営指導委員は強化地域拠点の発表内容について、指導・助言を行う。
- 第3回運営指導委員会の開催
 ・各強化地域拠点が、1年間の取組の成果と課題を報告する。運営指導委員会は、報告を踏まえ、次年度に向けてのアドバイスを行う。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月		第1回山梨県英語教育強化推進委員会 ・各拠点地域より、取組の内容、計画について説明。 ・指導運営委員による説明に対しての指導・助言。
5月	○第1回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（12日） ・研究の方向性と具体的な研究計画を確認 ○春日居小学校校内研（18日） ・県指導主事を招いて、英語教育についての学習会	
6月	○春日居地域教育協議会授業公開（春日居中学校）（3日） ・春日居中1年、2年の英語科の授業を参観 ○第1回笛吹地区英語教育推進会議（4日） ・各校の委員に研究内容の周知	
7月	○春日居小6年生の中学校体験授業（14日） ・春日居中学校で英語の授業を体験	

8月	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（7日） ・研究の進捗状況とこれまでの成果と課題を共有 ・英語フォーラムに向けての取組を確認 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○春日居小学校授業研究会（9日） ・6年1組「Turn right 道案内をしよう」 聴き合い伝え合う活動を通して、4技能を高める授業 ○第3回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（9日） ・英語フォーラムの発表内容について協議 ○「山梨県英語フォーラム」への参加（15日） ・これまでの取組を発表 ○笛吹地区公開研究発表会(春日居中学校)（21日） ・2年1組「A New Language Service」 既習事項を活用して、自分の考えを英語で書く授業 ○春日居小学校授業研（26日） ・3年3組「How many? いろいろなものを数えよう」 英語で数を数えたり尋ねたりするゲームを通して、英語でコミュニケーションを図ろうとする意識を高める授業 ○第4回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（26日） ・研究の進捗状況とこれまでの成果と課題を共有 	<ul style="list-style-type: none"> ○第2回山梨県英語教育強化推進委員（山梨県英語フォーラム）（15日） ・ポスターセッション形式で研究校が取組を発表。参加対象は県下全ての小・中・高等学校。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ○春日居地域教育協議会授業公開(春日居小)（4日） ・5年2組「What's this? It's a piano.」 英単語や会話表現に繰り返し触れさせる春日居小の学習過程に基づいた授業 ○第2回笛吹地区英語教育推進会議（26日） ・英語フォーラムでのポスターセッション及び講演内容の報告 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ○第5回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（12日） ○第6回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（29日） 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ○「英語教育強化地域拠点事業成果発表会」への参加（9日） ・本年度の取組の成果を発表 	<ul style="list-style-type: none"> ○第3回山梨県英語教育強化推進委員会（英語教育強化地域拠点事業成果発表会）（9日） ・各拠点地域より1年間の取組の成果と課題の報告。 ・運営指導委員による次年度に向けてのアドバイス。
3月	<ul style="list-style-type: none"> ○第3回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（1日） ○第7回笛吹地区英語教育推進校連絡会議（3日） 	
【その他の取組】※あれば記入		